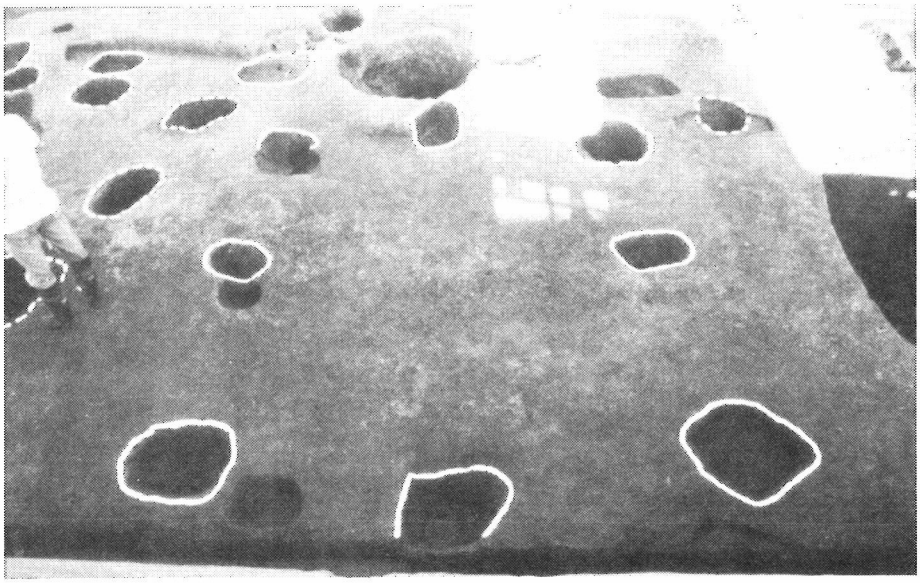
鬼虎川遺跡第４１次発掘調査報告



2002年8月

財団法人東大阪市文化財協会

例言

1. 本書は共同住宅建設に伴う鬼虎川遺跡第41次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は川中良太氏の委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が実施した。発掘調査に伴う工事は川中良太氏から発注され株式会社ジオ・アーキネットが行った。
3. 現地調査と整理は金村浩一を担当者とし、事務局体制等は次の通りである(2002年3月現在)。

   理事長　日吉亘
   常務理事　北山良(東大阪市教育委員会社会教育部参事)
   事務局長　小島進
   調査部長　同上(兼務)
   庶務部長　同上(兼務)
   庶務主任　上野節子
   庶務部員　朝田直美　大林亨
   調査補助　辻康男　永田明徳　西村和浩　西村康彦　樋口周作　藤原俊明　藪野勝久　山田昌人　重定礼子　武田慎平
4. 調査における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。
5. 遺構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用し、水準高はT.P.値を用いた。基準点の移設は株式会社かんこうに委託した。
6. 本書の編集と執筆は金村が行った。
7. 本調査の経費はすべて川中良太氏のご負担によるものである。調査に御理解と御協力をいただき、深く謝意を表したい。
8. 現地調査は、株式会社ジオ・アーキネット、安西工業株式会社他の諸氏による協力によって円滑に進行した。記して謝意を表したい。

目次

例言
目次
第1章　はじめに・・1
第2章　層序の概略・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第3章　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第4章　おわりに・・24
注
報告書抄録

表紙写真
第IV層上面検出の掘立柱建物402(西から)
左の点線は掘立柱建物406。奥の白線を引いていない大きな丸い穴は第III層上面検出の井戸301。

第1章　はじめに

鬼虎川遺跡は大阪府東大阪市西石切町・弥生町・宝町にひろがり、生駒山西麓の沖積扇状地の扇端部(現地表面約T.P.+7m)から河内平野の沖積低地(同約T.P.+5m)に位置する。

鬼虎川遺跡の西には鎌倉～室町時代の集落等が発見されている水走遺跡が接し、東には弥生時代の集落や平安～室町時代の集落等が発見されている西ノ辻遺跡・植附遺跡が接する。これらの遺跡は行政的な区分であり、各時代の集落のひろがり等は遺跡範囲を越えていたと考えられる。

鬼虎川遺跡は1963(昭和38)年に大阪外環状線(国道170号線)建設工事の際に弥生土器が採集され、存在が明らかとなった(注1)。その後の発掘調査によって弥生時代の建物や墓等が多数発見され、近畿地方でも有数の弥生時代集落遺跡とされている。通常では約2000年という長い間に腐食して痕跡すら残らない木製・骨製の遺物が、この遺跡では原形を保ったまま出土する例が多いことも学界では名高い。

1981(昭和56)年以降、鬼虎川遺跡とその周辺では近畿日本鉄道東大阪線建設に伴う調査が実施された。この鉄道建設は国道308号線拡幅等の道路整備と合わせて行われることとなり、これらに伴う発掘調査は1991(平成3)年に終了した。その結果、鬼虎川遺跡が縄文時代から現代に至る複合遺跡であることが明かとなった。鉄道・道路が整備されるに従い共同住宅建設等が遺跡範囲内で増加し、さらに近年では大阪外環状線西石切立体交差事業に伴う発掘調査が実施され、現在では54次におよぶ発掘調査が実施されている(注2)。

今回、川中良太氏によって東大阪市西石切町5丁目181-1・2において共同住宅の建設が計画された。計画地が鬼虎川遺跡の範囲内に位置するため東大阪市教育委員会文化財課によって試掘調査が実施された。その結果、発掘調査の必要が指示され、関係機関の協議の結果、財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施することとなった。

調査着手前の調査地は平坦な空地で、西には南北方向の水路が隣接する。南は鬼虎川遺跡第23次発掘調査や第33次発掘調査等が実施されている国道308号線等が接している(注3)。また、西方には鬼虎川遺跡第22次発掘調査地が位置する(注4)。

調査は試掘結果にもとづき、現地表面下約1.1mまでの盛土・現代耕土層を機械によって掘削し、以

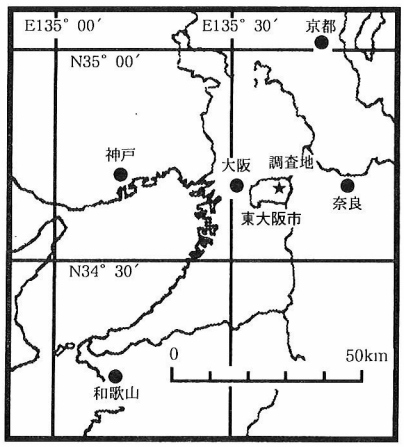


図1.1　東大阪市及び調査地位置図(S=1：200,000)

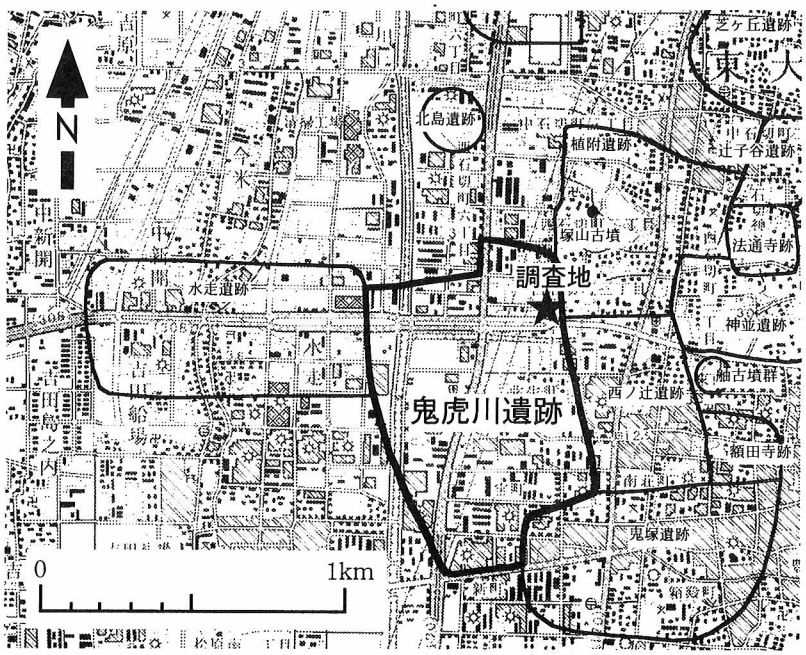


図1.2　調査地及び周辺遺跡位置図(S=1: 25,000)

下を人力によって掘削しつつ、遺構や遺物の検出作業等を行う計画であった。調査は鋼矢板打設等の土留め工事を施さずに行った。周辺での調査結果から調査地に縄文時代の海蝕崖が位置し調査区の東半は掘削が浅く、西半は深くなることが予想された。このため機械掘削分と一部の人力掘削分の残土を場外に搬出し、その後、調査区東半の調査を先に終了させて残土の仮置き場とすることとした。調査区西半の深い部分では機械を併用して掘削している。調査面積は約325㎡、調査期間は1996(平成8)年7月22日～10月3日である(図1.5)。

図1.3　機械掘削風景(北東から)
左手の高架は近畿日本鉄道東大阪線。
高架の下は第二阪奈有料道路。
車が走る道路は国道308号線。

その結果、弥生時代中期の溝、古墳時代の掘立柱建物群、古代のピット、中世の井戸や溝、近世の耕作跡等を検出し、整理箱(外寸386mm×59mm×155mm)に17箱の土器類(復元した状態を含む)と4箱の木器類、若干の石製品等を得た。出土遺物には遺跡の略称、次数、登録番号を注記している(例:KTR41R001)。

今回の調査によって鬼虎川遺跡の様相を知る貴重な資料を得ることができた。次章以下に調査の結果を略述する。

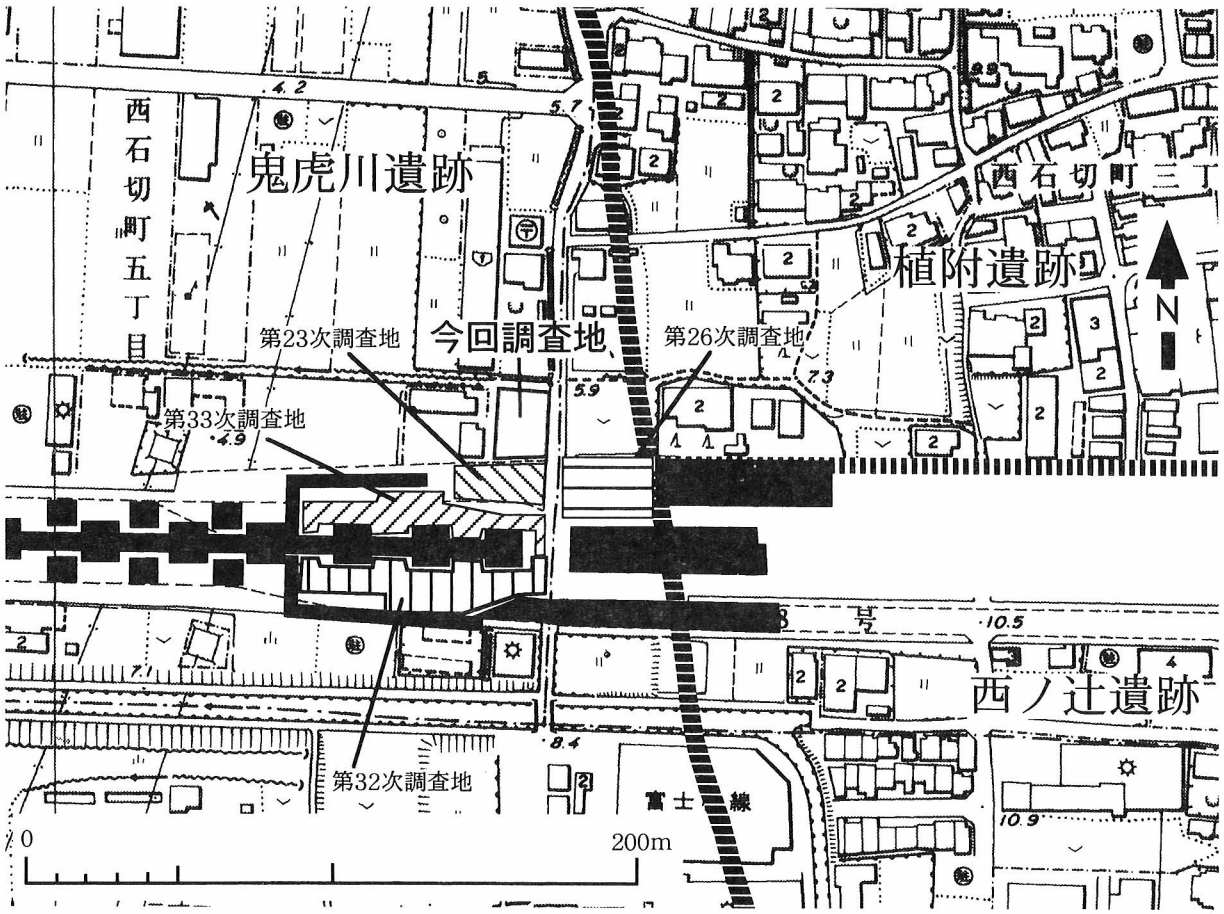


図1.4　調査地及び周辺主要調査位置図(S=1：2,500)

第2章　層序の概略

調査区内には縄文時代の海蝕崖が位置し、調査区東半では現代耕土の直下がベースメントとなる部分がある(注6)。これに対して調査区西端では現代耕土下面からベースメント上面までに約1.9mに及ぶ地層が堆積していた。その層序の概略は上層から順に以下の通りである。

なお、調査区東半の北壁土層図を作成後に埋め戻し、続く西半の土層図は北壁が崩落したため作成を諦め、南壁を実測した(図2.1・2)。

表土・盛土・現代耕土層

これらは機械によって掘削した。

第I層　灰色中粒砂混砂質シルト～シルト層

下面で溝やピット等の遺構を検出した。本層からは伊万里片や唐津片、飴釉土師皿片等が出土した。本層は近代～近世の耕土層と考えられる。

第II層　主に黄灰色を呈する中粒砂・細砂混砂質シルト・シルト・粘質シルト層

5層に分けられる。本層の掘削は上部と下部に分けて行い、各層境で積極的な遺構検出は行わなかった。現地調査終了後の検討により、本層は大きく2層に分けられ、それぞれの上面に遺構が存在したことが判明した。

第II層上部

多量の古墳時代の土器類とともに少量の土師器皿片や瓦器釜・火舎片等が出土した。上面で溝を検出している。本層は14世紀後半～15世紀頃の盛土と考えられる。

第II層下部

多量の古墳時代の土器類とともに少量の土師器皿片、瓦器碗片、黒色土器A類碗片、緑釉陶器細片等が出土した。上面で溝等を検出している。本層は12世紀頃の盛土と考えられる。

第III層　黒褐色粗砂混粘質シルト層

一つの地層として掘削したが、数層に細分できるものと思われる。多量の古墳時代の土器類が出土したが、数点の黒色土器A類や8世紀頃の土師器坏の微細片が含まれる。上面で溝等を検出した。

第IV層　にぶい黄褐色粗砂～細砂層

古墳時代の土師器片や須恵器片等が少量出土した。上面で古墳時代の掘立柱建物等を検出している。本層は古墳時代の流水による堆積層と考えられる。

第V層　灰色中粒砂混粘質シルト層

土器はほとんど出土しなかった。本層上面で柱穴等を検出した。本層は弥

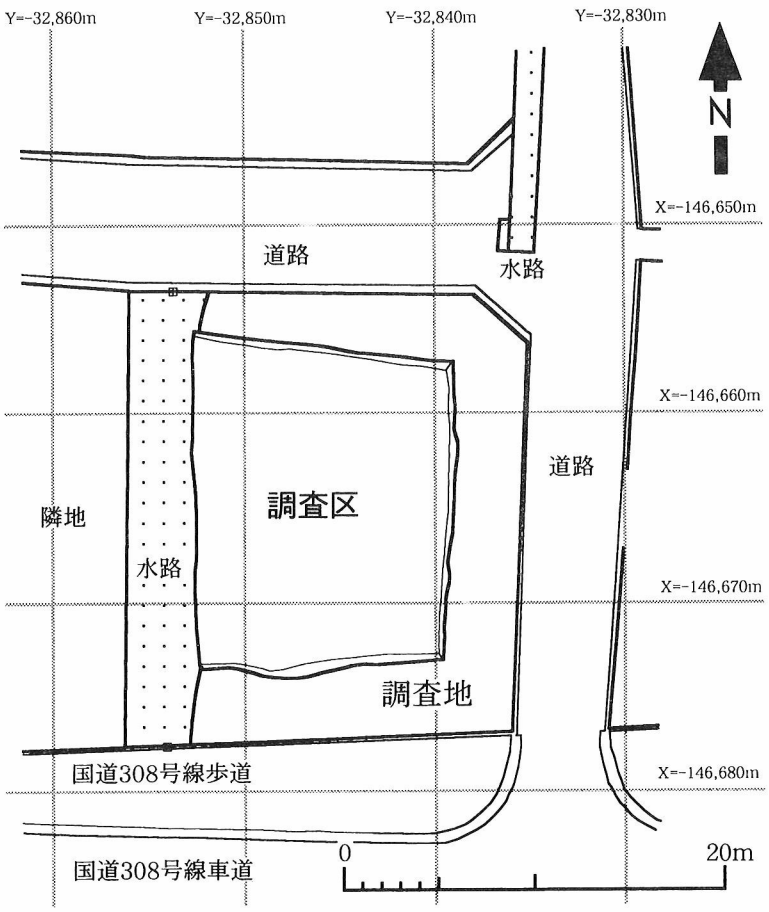
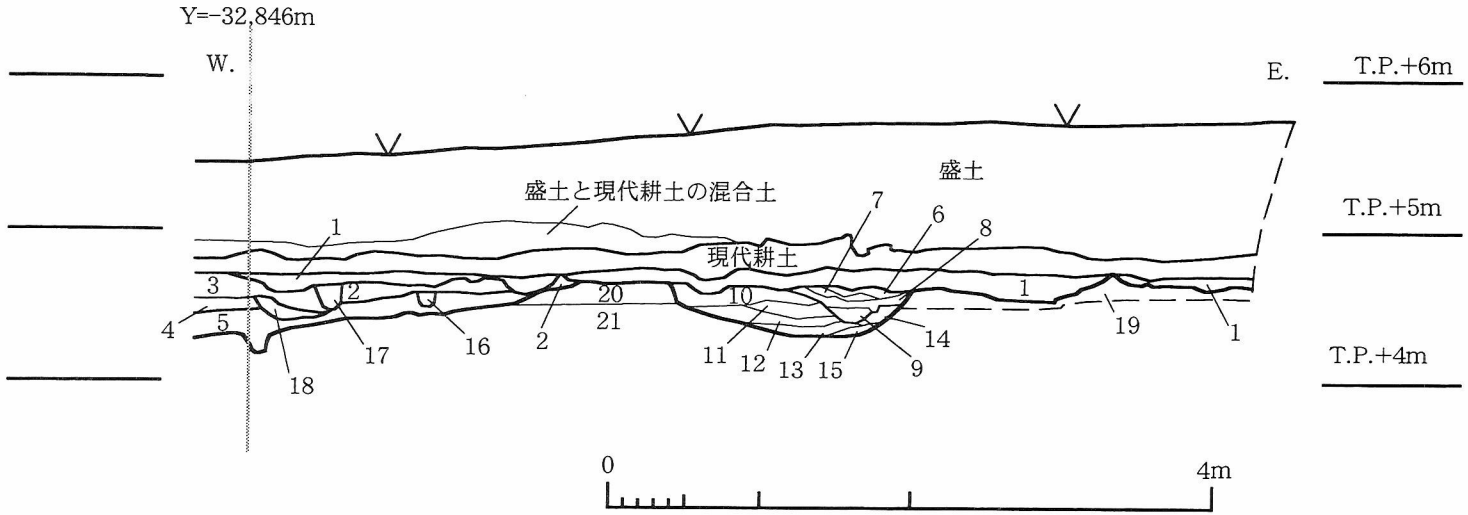


図1.5　調査区位置図(S=1：400)

図2.1　調査区北壁東半土層図(S=1：50)



1:10Y4/2オリーブ灰色細砂混砂質シルト(第I層)
2:10YR6/2にぶい黄橙色中粒砂混砂質シルト(第II層上部)
3:2.5Y5/1黄灰色中粒砂混砂質シルト～細砂(第II層上部)
4:2.5Y4/1黄灰色中粒砂混細砂～砂質シルト(第II層下部)
5:10YR2/2黒褐色中粒砂混粘質シルト(第III層)

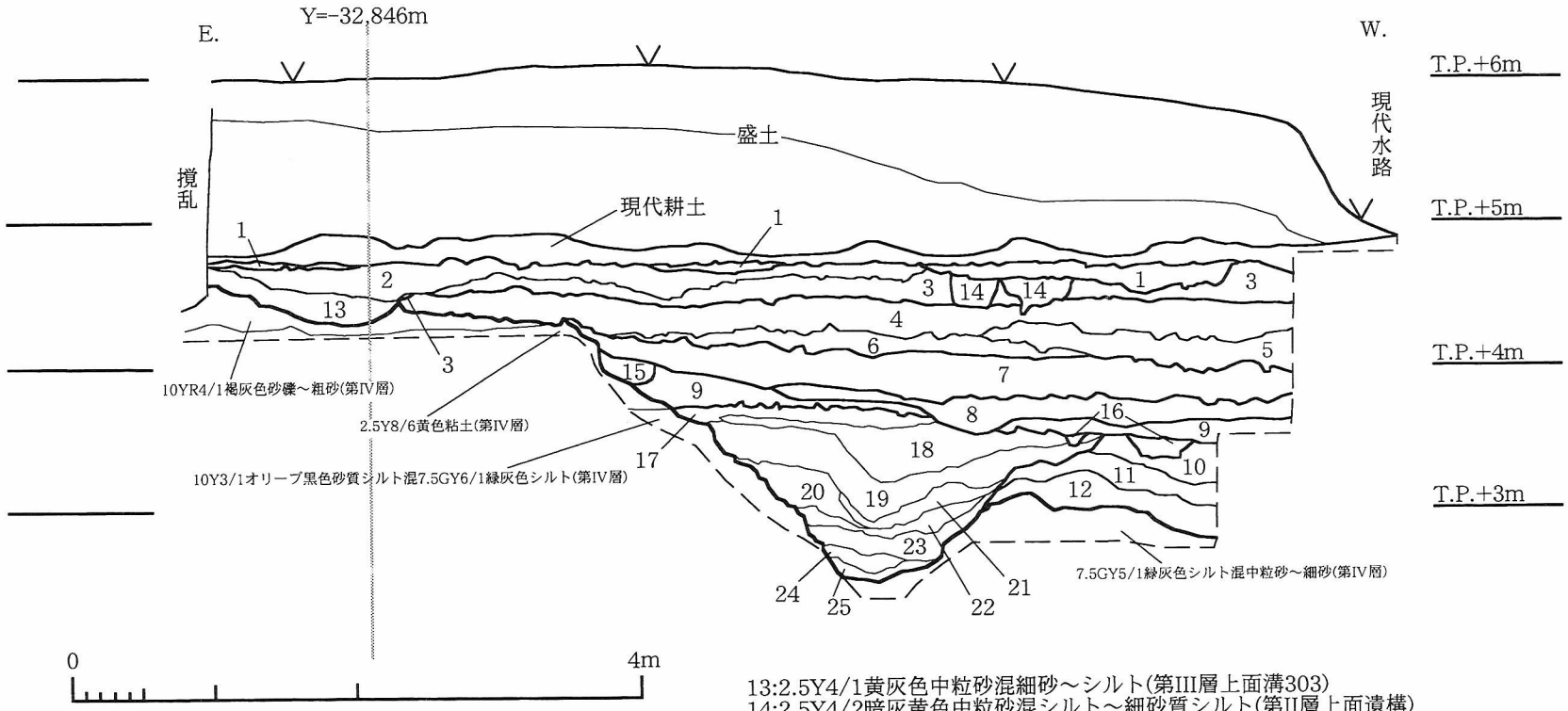
6:2.5Y6/1黄灰色中粒砂混砂質シルト～細砂(鉄分沈着顕著)(第I層下面溝101)
7:2.5Y6/1黄灰色中粒砂混細砂～砂質シルト(鉄分沈着顕著)(第I層下面溝101)
8:2.5Y5/1黄灰色中粒砂混砂質シルト(鉄分沈着顕著)(第I層下面溝101)
9:10YR5/1褐灰色砂質シルト混中粒砂(鉄分沈着顕著)(第I層下面溝101)

10:10YR6/1褐灰色中粒砂混砂質シルト(第II層上面溝201)
11:2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂混砂質シルト(第II層上面溝201)
12:2.5Y5/1黄灰色中粒砂混細砂～砂質シルト(第II層上面溝201)
13:N4/灰色中粒砂混細砂(第II層上面溝201)
14:N4/灰色細砂混中粒砂(第II層上面溝201)
15:N4/灰色中粒砂混細砂と地山ブロックの混合土(第II層上面溝201)

16:2.5Y7/4浅黄色細砂混砂質シルト(第III層上面ピット)
17:5Y2/1中粒砂混砂質シルト(締まり無し)(第III層上面建物302柱穴)
18:10YR2/1黒色中粒砂混砂質シルト～シルト(第III層上面溝303)

19:2.5Y8/8黄色粘土(第IV層)
20:10YR6/6明黄褐色シルト混粗砂(第IV層)
21:10YR6/6明黄褐色シルト粘土(第IV層)

図2.2　調査区南壁西半土層図(S=1：50)



1:10Y4/1灰色中粒砂混シルト～砂質シルト(第I層)
2:2.5Y5/3黄褐色中粒砂混砂質シルト～シルト(第II層上部)
3:5Y4/1灰色中粒砂混シルト～砂質シルト(第II層上部)
4:2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～粗砂混シルト～砂質シルト(第II層下部)
5:2.5Y4/1黄灰色中粒砂混シルト～粘質シルト(鉄分沈着)(第II層下部)
6:10YR4/1褐灰色細砂混シルト～粘質シルト(鉄分沈着顕著)(第II層下部)
7:10YR3/1黒褐色粗砂混粘質シルト(炭含む)(第III層)
8:2.5Y6/3にぶい黄色粗砂～細砂(鉄分沈着)(第IV層)
9:5Y5/1灰色中粒砂混粘質シルト(鉄分沈着顕著)(第V層)
10:2.5GY2/1黒色中粒砂混粘質シルト(第VI層)
11:N3/暗灰色中粒砂混粘土(第VI層)
12:N2/黒色砂礫混粘土(10GY4/1暗緑灰色粘質シルトブロック混合)(第VI層)
13:2.5Y4/1黄灰色中粒砂混細砂～シルト(第III層上面溝303)
14:2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂混シルト～細砂質シルト(第II層上面遺構)
15:2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト～細砂(汚れた地山)(第IV層上面遺構)
16:5GY7/1明オリーブ灰色粘土(第VI層上面遺構)

17:10GY3/1暗緑灰色中粒砂～細砂混粘土(第VI層上面溝601)
18:7.5GY4/1暗緑灰色中粒砂～細砂混粘土(19層より緑色)(第VI層上面溝601)
19:7.5GY4/1暗緑灰色中粒砂～細砂混粘土(18層より暗い)(第VI層上面溝601)
20:10GY4/1暗緑灰色中粒砂～細砂混粘質シルト(10GY5/1緑灰色シルトブロック混合)
(第VI層上面溝601)
21:7.5GY2/1緑黒色中粒砂～細砂混粘質シルト～粘土(第VI層上面溝601)
22:10GY4/1暗緑灰色～10GY2/1緑黒色中粒砂混細砂～粘質シルト(第VI層上面溝601)
23:10GY4/1暗緑灰色～10GY2/1緑黒色中粒砂混細砂～砂質シルト(第VI層上面溝601)
24:10Y4/1灰色細砂(2.5GY3/1灰色シルトブロック混合)(第VI層上面溝601)
25:7.5Y3/1オリーブ黒色中粒砂～細砂(第VI層上面溝601)

生時代後期～古墳時代前期頃に流水によって堆積したと考えられる。

第VI層　主に黒色を呈する砂礫・中粒砂混じり粘質シルト・粘土層

3層に分けられる。本層は機械を併用して一括して掘削した。このため採集できた遺物は少ない。遺物は弥生時代前期～中期と思われる壺片等の土器である。上面で溝等を検出した。本層は弥生時代前期に堆積したものであろうか。

第VII層　主に黒色を呈する砂礫・中粒砂混じり粘質シルト・粘土層

更新統最上部に相当する、いわゆる地山である。

第3章　遺構と遺物

第I層下面検出遺構

溝や不整形な落ち込み、ピット等を検出した。不整形な落ち込みは溝状遺構の痕跡と思われる。、これらの溝状遺構は畑の畝の痕跡と考えられる。第I層や遺構からは伊万里片や唐津片、飴釉土師皿片、土人形(図3.2)等が出土しており、これらは近世～近代のものと考えられる。また、溝からは中世の瀬戸碗(図3.6-1)や土師器土錘(図3.6-2)等が出土している。溝101は埋土が異なり、後述する溝201の後身である。

なお、L字状にならぶ杭列や調査区西部のピット列は現代の土地区画を示すものである。ピットの中には土地境界を示すコンクリート製の標柱が埋設されていたものもある。

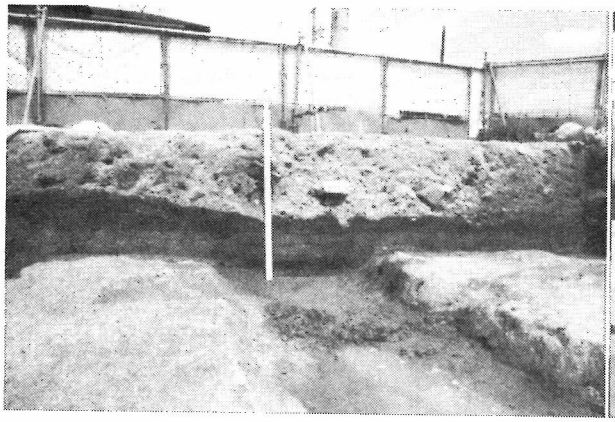


図2.3　調査区北壁東部土層(南から)

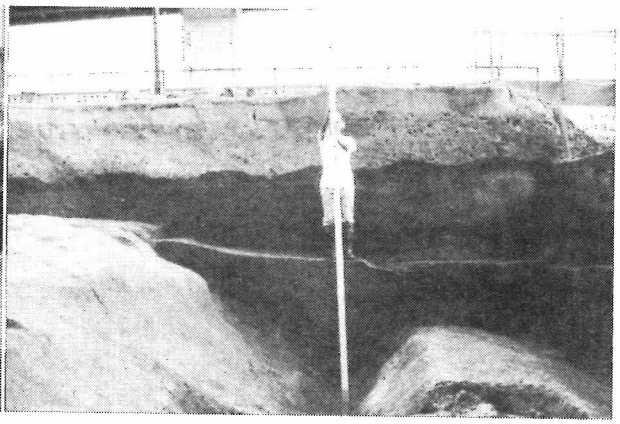


図2.4　調査区南壁西部土層(北から)

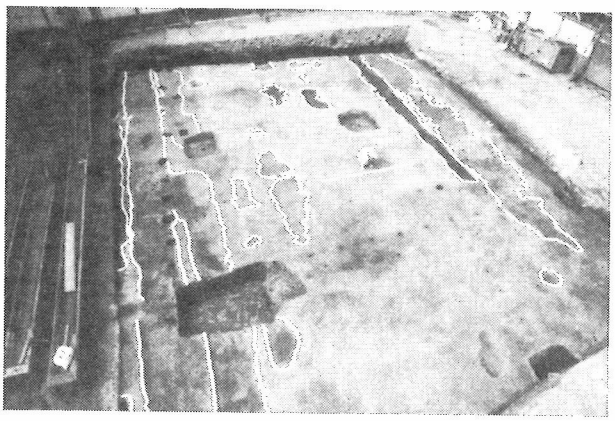


図3.1　第I層下面検出遺構全景(南西から)

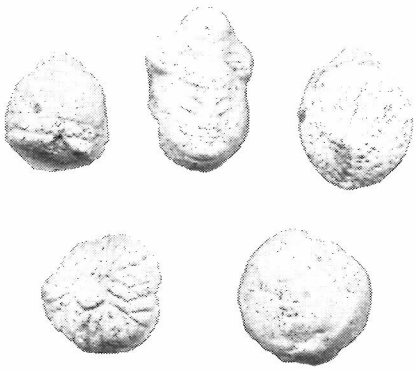
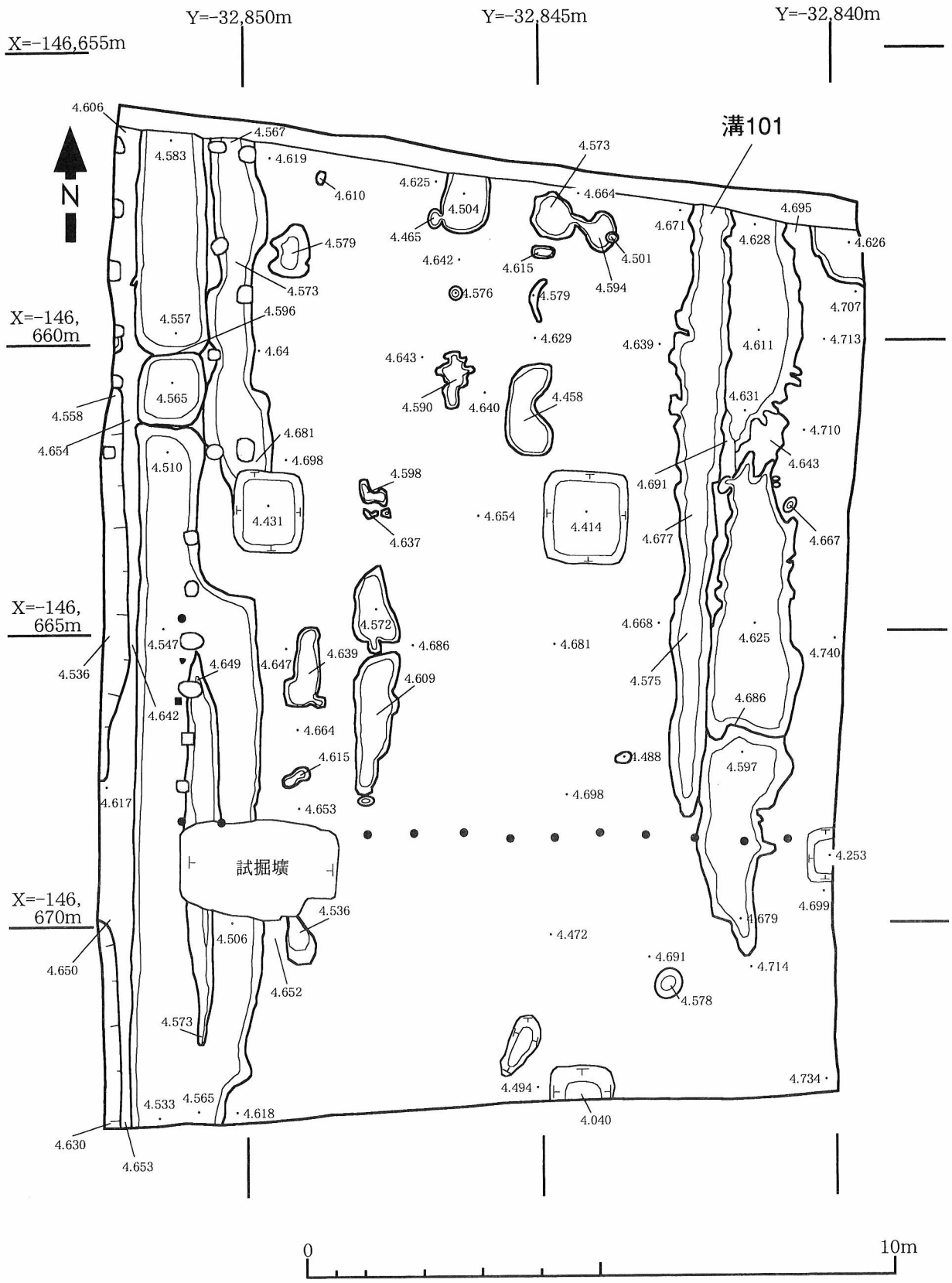


図3.2　第I層出土の土人形(S≒1：1)
裏面はすべて平らである。



トーンは現代のピット。
黒塗りは杭。
数字はT.P.値。

図 3.3　第Ⅰ層下面検出遺構平面図(S=1：100)

第II層上面検出遺構

調査区東部で南北方向の溝を検出した(溝201)。幅約170cm、最深約22cmを測り、長さ約15mを検出した。底はわずかに起伏があり、一方に深くなるものではない。両端とも調査区外へ続き、第32次調査で検出された水路の続きと思われる(注5)。東肩には多数の杭が打ち込まれていた。埋土は数層に分かれ、上部から少量の伊万里細片や陶器擂鉢片(図3.6-3)瓦器擂鉢片(図3.6-4)、瓦器甕片(図3.6-5)等が、下部からは少量の土師器皿片(図3.6-6)や瓦器釜細片等が出土した。他に弥生時代から鎌倉時代の土器片や、中世の丸平瓦片等が出土している。出土遺物から室町時代後半頃に掘削され、江戸時代に埋まったものと考えられる。埋没後に第I層下面で述べた溝101に掘りなおされる。

溝201より東に遺構がまったく検出されなかったことから、溝201の東は段をなして高くなっていたと考えられる。杭は土留めのために打ち込まれたものであろう。

第III層上面検出遺構

先に述べたように遺構面を内包する第II層を上部と下部に分けて掘削し、各面で遺構検出は行わなかった。ここに述べる第III層上面で検出した遺構の多くは本来、その第II層中の遺構面から切り込まれているものである。

井戸301

調査区中央部で検出した。溝304を切る。平面は東西約140cm、南北約150cmを測る不整形な円形を呈する。諸般の事情で検出面から約1mの深さで掘削を中止した。井戸枠は検出されなかったが、形状から井戸と考えられる。埋土は2層に分けられる。検出面から約20cmまでの上部は5Y4/3暗オリーブ色中粒砂混砂質シルト層で第II層上部に酷似する。それ以下は2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂混シルト質粘土層であった。埋土から弥生時代から鎌倉時代の土器片等とともに土師器皿微細片(いわゆるへそ皿)や瓦器釜片(図3.6-7)・擂鉢片(図3.6-8・9)・火舎片、丸平瓦片等が出土した。瓦器釜片には2層上部出土のもの(図3.6-31)と同形のものがある。

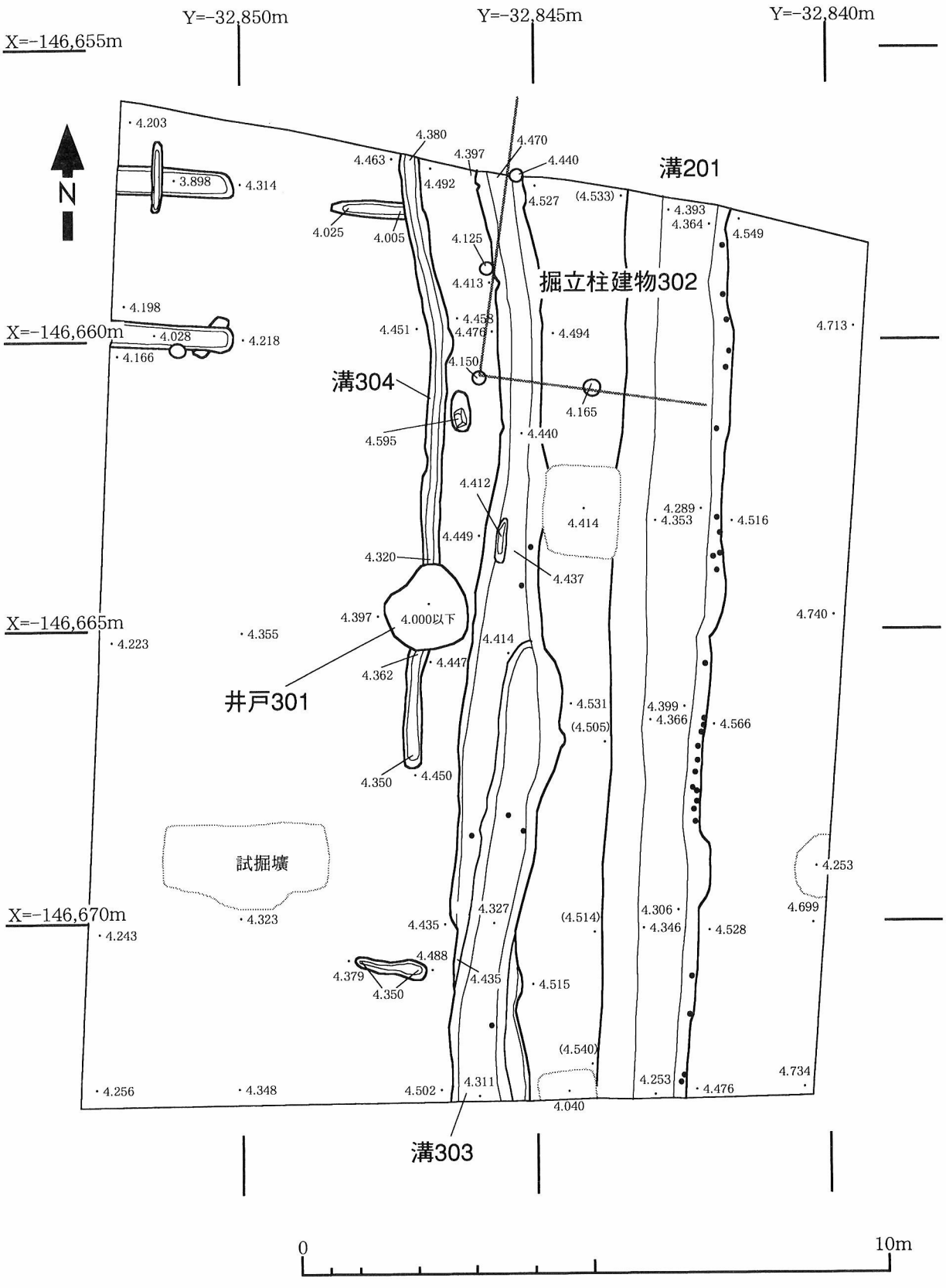
掘立柱建物302

調査区東北部で検出した。溝201に切られ、溝304を切る。座標北から東へ約9°振る方位をとり南北3.4m(2間)以上、東西1.8m(1間)以上を測る。南北の柱間は約160cmと約180cmを測る。柱穴は最大径約28cmを測る円形を呈し、深いもので約32cmを測る。時期を決定できる遺物は出土しなかったが、溝304を切ることから、井戸301と同時期の建物と思われる。

図3.4　第II層上面・3層上面検出遺構(南から)
最も右の溝は第II層上面の溝201。
その左の溝は第III層上面の溝303。
中央の丸い穴は第III層上面の井戸301。

第II層上部出土遺物

多量の古墳時代の土器類とともに少量の土師器皿片(図3.6-10～18)や土師器台付皿片(図3.6-19)、土師器釜片(図3.6-20)、瓦器碗片(図3.6-21～24)、白磁碗片(図3.6-25・26)、青磁碗片(図3.6-27)、瓦器擂鉢片(図3.6-28・29)、瓦器火舎片(図3.6-30)、瓦器釜(図3.6-31)、土師器碗(図3.6-32・33)、丸平瓦片等が出土した。石製品(図3.6-34・3.7)は全面を平滑に研磨し、下部中央に穴を穿っている。欠損部分があり、全体の形状は不明である。古墳時代のものであろうか。こ



数字は第III層上面T.P.値。
(数字)は第II層上面T.P.値。
黒塗りは杭。

図3.5　第II層上面・第III層上面検出遺構平面図(S=1：100)

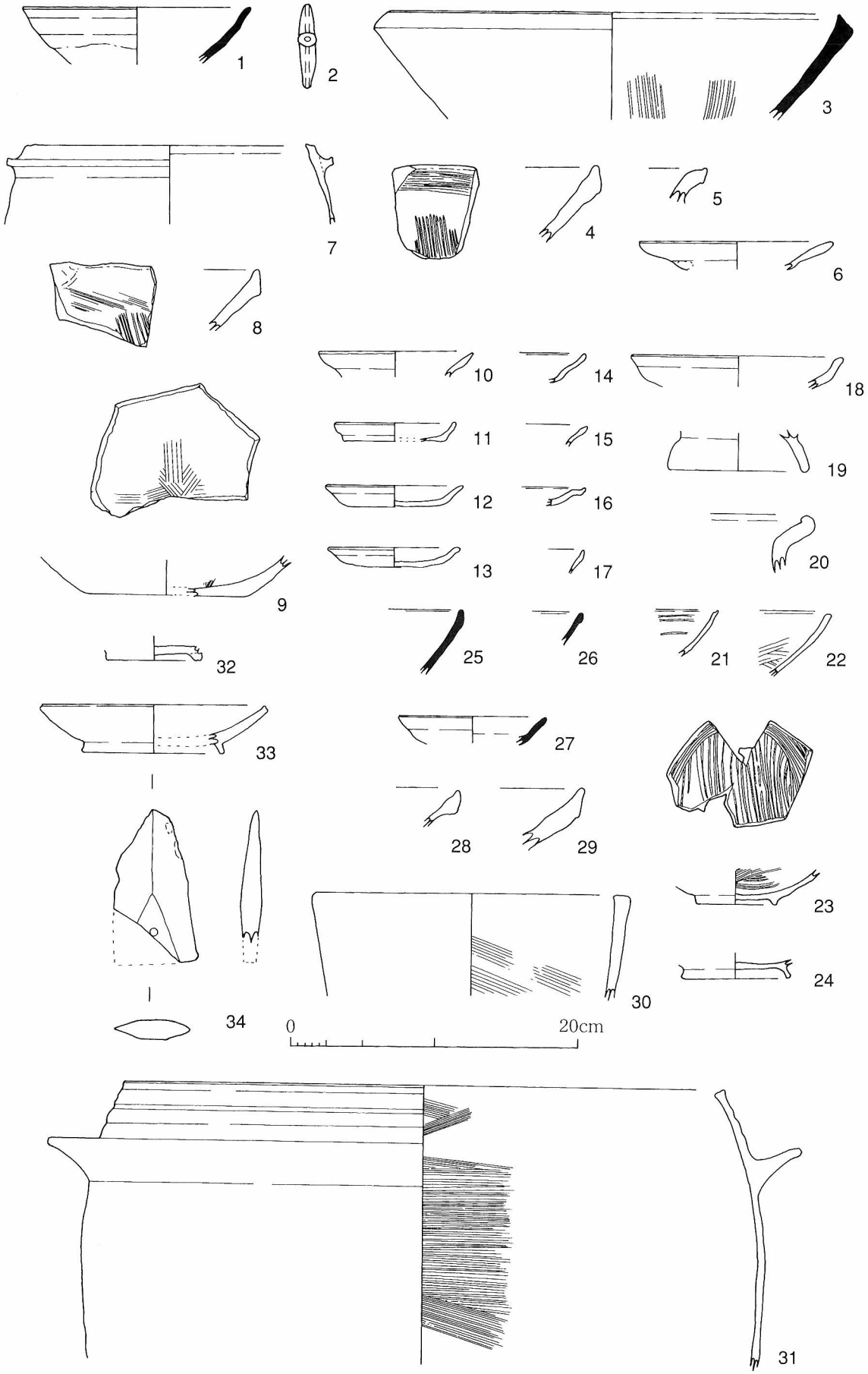


図3.6　第Ⅰ層(1～2)・第Ⅱ層上面溝201(3～6)・第Ⅲ層上面井戸301(7～9)・第Ⅱ層上部(10～34)出土遺物(2・34はS=1：2、他はS=1：4)

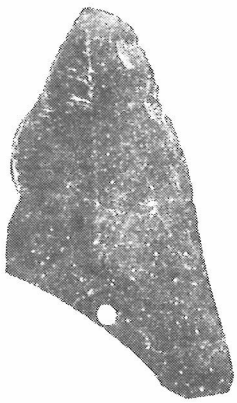


図3.7　第II層上部出土石製品(S=1：1)
図3.6-34

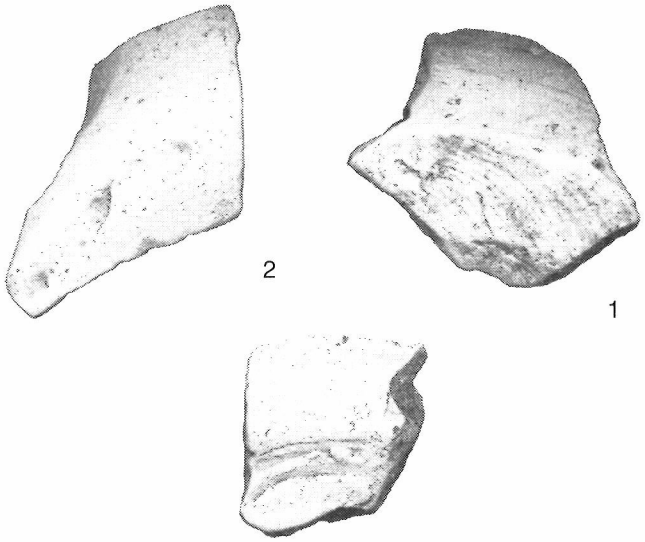


図3.8　第II層上部出土回転台土師器坏(S=1：1)

の他、回転台土師器坏の底部細片が3点出土した(図3.8・9)。いずれも摩耗が著しく調整は不明である。1点は底部外面に糸切り痕を残す。胎土は浅黄橙色を呈し、径1mm以下の石英や長石、赤色粒子を含む。おそらく搬入品であろう。出土遺物のうち最も新しい時期のものは井戸301と同時期と思われ、本層によって井戸301が完全に埋められたと考えられる。

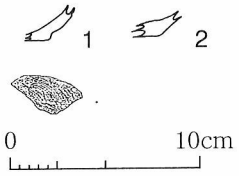


図3.9　同上実測図(S=1：4)

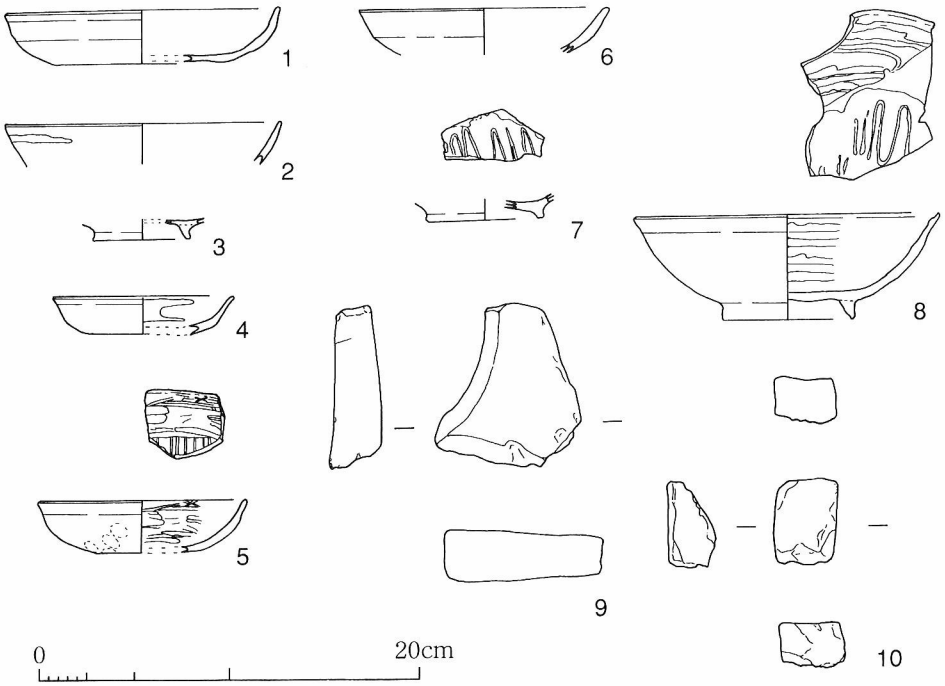


図3.10　第III層上面溝303(1～5)・第II層下部(6～10)出土遺物(S=1：4)

溝 303

調査区東部で検出した。建物302に切られる。南北方向で幅80～170cm、最深約18cmを測り、長さ約16mを検出した。2条の溝が重複しているように見えるが、掘削時の痕跡であろう。底はわずかに起伏があり、一方に深くなるものではない。両端とも調査区外へ続く。ところどころに杭が打ち込まれていた。埋土は2.5Y4/1黄灰色中粒砂混細砂～シルト層で、多量の古墳時代の土器片とともに土師器皿片(図3.10-1)や土師器釜細片、瓦器碗片(図3.10-2・3)、瓦器皿片(図3.10-4・5)等が出土した。出土遺物から12世紀前半頃に埋まったものと考えられる。なお、この溝は第33次調査で検出されている溝44の続きである(注6)。

溝 304

溝303の西に位置し、ほぼ並行する。井戸301に切られる。南北方向で、幅約30cm、最深約12cmを測り、長さ約10mを検出した。南端を検出し、北端は調査区外となる。北へ向かって低くなる。古墳時代の土器片とともに土師器皿微細片等が出土した。溝303と並行することから、これと同時期のものと思われる。

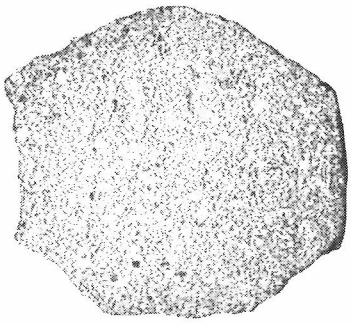


図3.11　第II層下部出土石製品
(S=1：1)
上は図3.12-13。
下は磨製蛤刃石斧細片。

第II層下部出土遺物

多量の古墳時代の土器類とともに少量の土師器皿片(図3.10-6)、瓦器碗片(図3.10-7)、黒色土器A類碗片(図3.10-8)、緑釉陶器細片、砥石(図3.10-9・10)等が出土した。

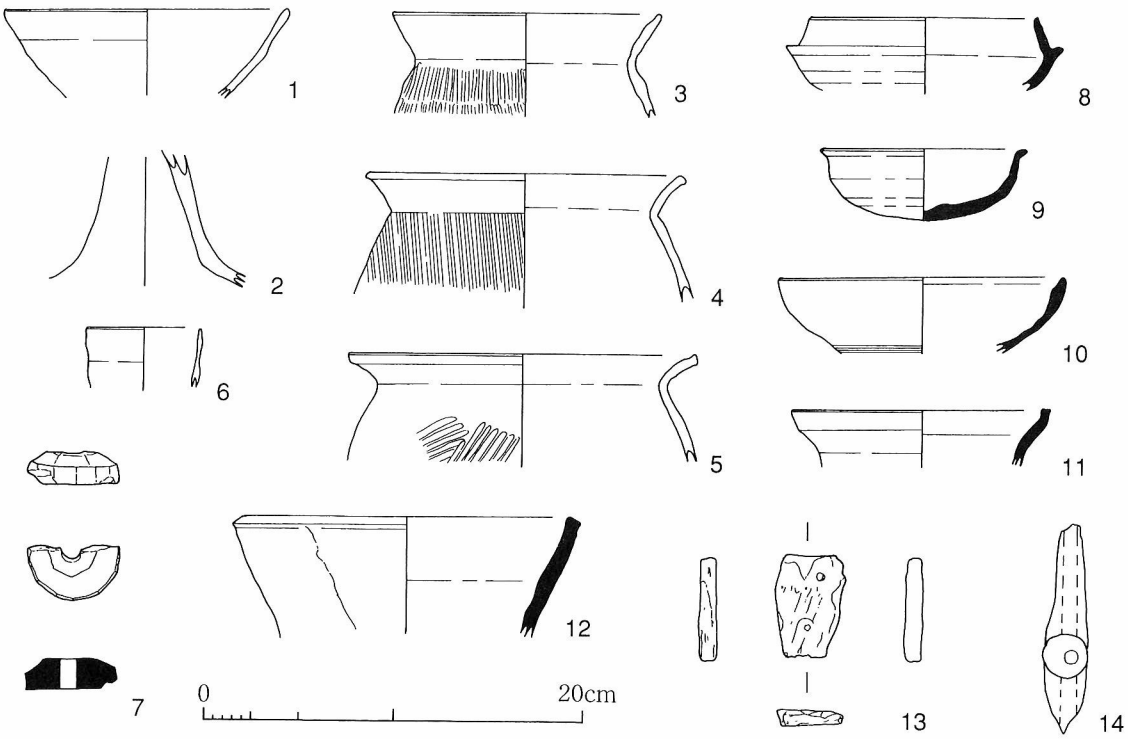


図3.12　第III層出土遺物(7・13・14はS=1：2、他はS=1：4)

小溝

調査区中央部から西部で溝やピット等を検出した。溝は最大幅約50cm、最深約48cmを測り、耕作に伴うものと考えられる。時期を決定できる遺物は出土しなかった。

第III層出土遺物

多量の古墳時代の土器類とともに数点の黒色土器A類や8世紀頃の土師器坏の微細片等が出土した。図示したものは古墳時代の遺物類である。土師器鉢口縁片(図3.12-1)や土師器高坏脚片(図3.12-2)、土師器甕片(図3.12-3～5)、製塩土器片(図3.12-6・4.2-1)、須恵器紡錘車片(図3.12-7)、須恵器坏片(図3.12-8)、須恵器坩片(図3.12-9)、須恵器高坏口縁片(図3.12-10・11)、須恵器甕口縁片(図3.12-12)、石製品(図3.12-13・3.11)、土師器土錘(図3.12-13)がある。石製品は側面を平滑に研磨しているが、他の面は凹凸を残す。2個の穴を穿つ転用品と思われる。他に弥生時代の磨製蛤刃石斧の細片がある(図3.11)。

第IV層上面検出遺構

掘立柱建物や柵列、土壙、溝、ピット等を検出した。ピットには柱や柱痕跡が検出され柱穴と確認できるものもあるが、すべてを建物に復元できなかった。遺存していた柱は数点あるが、加工痕を観察できたものは2点にすぎない。これらの遺構からは古墳時代の土師器や須恵器、製塩土器、馬歯・馬骨等が出土したが、ほとんどは細片で量も少ない。

掘立柱建物401

調査区北西端部で検出した。掘立柱建物406に切られる。ほぼ座標に沿う方位をとり、南北約2.9m(2間)、東西約2.6m(2間)を測る。東辺中央の柱穴(401-4)は掘立柱建物6の北辺柱穴(406-3)と重複していると思われる。南北の柱間は約150cm、東西の柱間は約130cmを測る。柱穴は一辺約70cmを測る隅丸方形や長辺約50cm、短辺約35cmを測る楕円形を呈するもの等があり、不揃いである。西辺の2基の柱穴には径約7cmを測る柱痕跡が確認できたが、他の柱穴では確認できなかった。それらは深いもので約40cmを測る。図示した遺物には北辺中央の柱穴

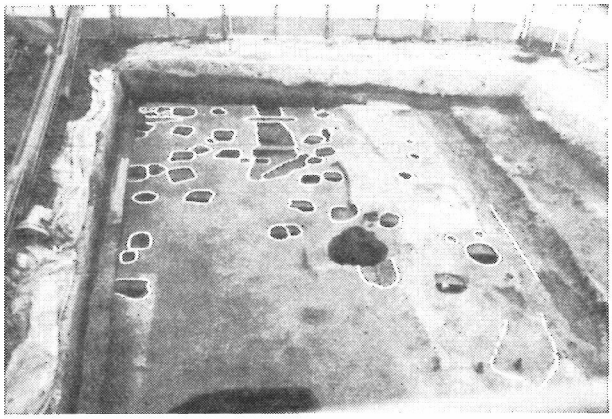


図3.13　第IV層上面遺構検出状況(南から)
検出当初の状態。この段階ではすべての遺構を把握しておらず、建物に復元できていなかった。

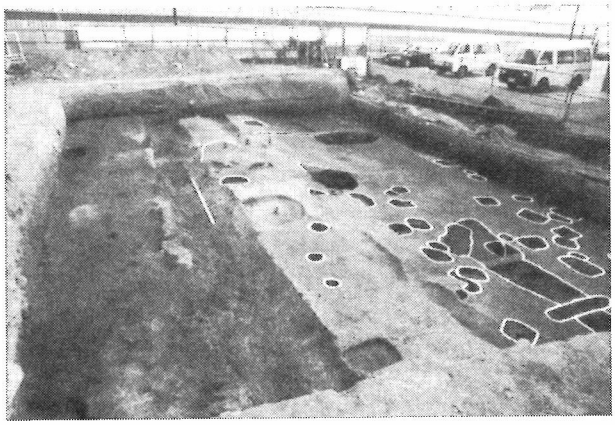


図3.14　同上(北東から)
この状態で撮影後、雨が降り、さらに多くの遺構を検出した。

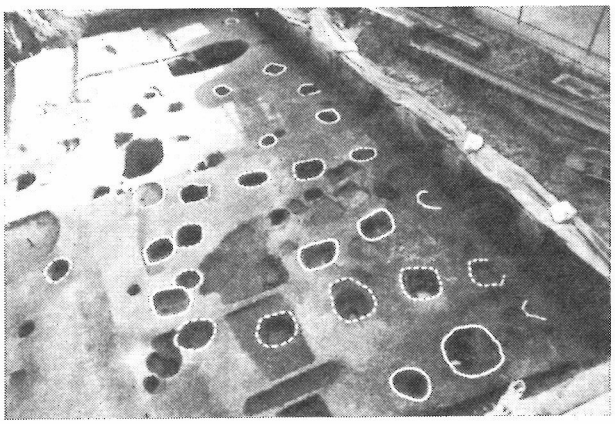


図3.15　第IV層上面検出遺構完掘状況(北東から)
手前の白線は掘立柱建物401。
点線の白線は掘立柱建物406。
奥の白線は掘立柱建物402。

(401-2)から出土した須恵器坏片(図3.26-1)、東南隅の柱穴(401-5)から出土した須恵器坏蓋片(図3.26-2)がある。

掘立柱建物 402

調査区西部で検出した。ほぼ座標に沿う方位をとり、南北約3.0m(2間)、東西約3.3m(2間)を測る。南北の柱間は約140cmと約160cmを、東西の柱間は約140～170cmを測る。柱穴は長辺約70cm、短辺約60cmを測る隅丸長方形や長辺約46cm、短辺約35cmを測る楕円形を呈するもの等があり、不揃いである。南西隅の柱穴以外には径約8～10cmを測る柱痕跡が確認できた。それらは深いもので約46cmを測る。図示した遺物には北西隅の柱穴(402-1)掘方から出土した須恵器坏片(図3.26-5)、東辺中央の柱穴(402-4)掘方から出土した製塩土器(図3.26-3・4.2-5)、南西隅の柱穴(402-5)柱痕跡から出土した土師器高坏脚部(図3.26-4)がある。他に西辺中央の(402-8)から韓式系土器細片が出土した(図3.31-7・14)。

掘立柱建物 403

調査区南西部で検出した。3基の柱穴を検出したに過ぎないが、ほとんどが調査区外となる建物と考えた。ほぼ座標に沿う方位をとり、南北約3.8m(2間)を測る。東西の規模は不明である。南北の柱間は約180cmを測る。柱穴は長辺約60cm、短辺約50cmを測る隅丸長方形や長辺約38cm、短辺約30cmを測る方形を呈するもの等があり、やや不揃いである。南東隅の柱穴以外には径約10cmを測る柱痕跡が確認できた。それらは深いもので約34cmを測る。図示した遺物には東辺中央の柱穴(403-2)掘方から出土した須恵器坏片(図3.26-6)と須恵器坏蓋片(図3.26-7)がある。同柱穴からは製塩土器底部細片も出土している(図4.2-8)。

掘立柱建物 404

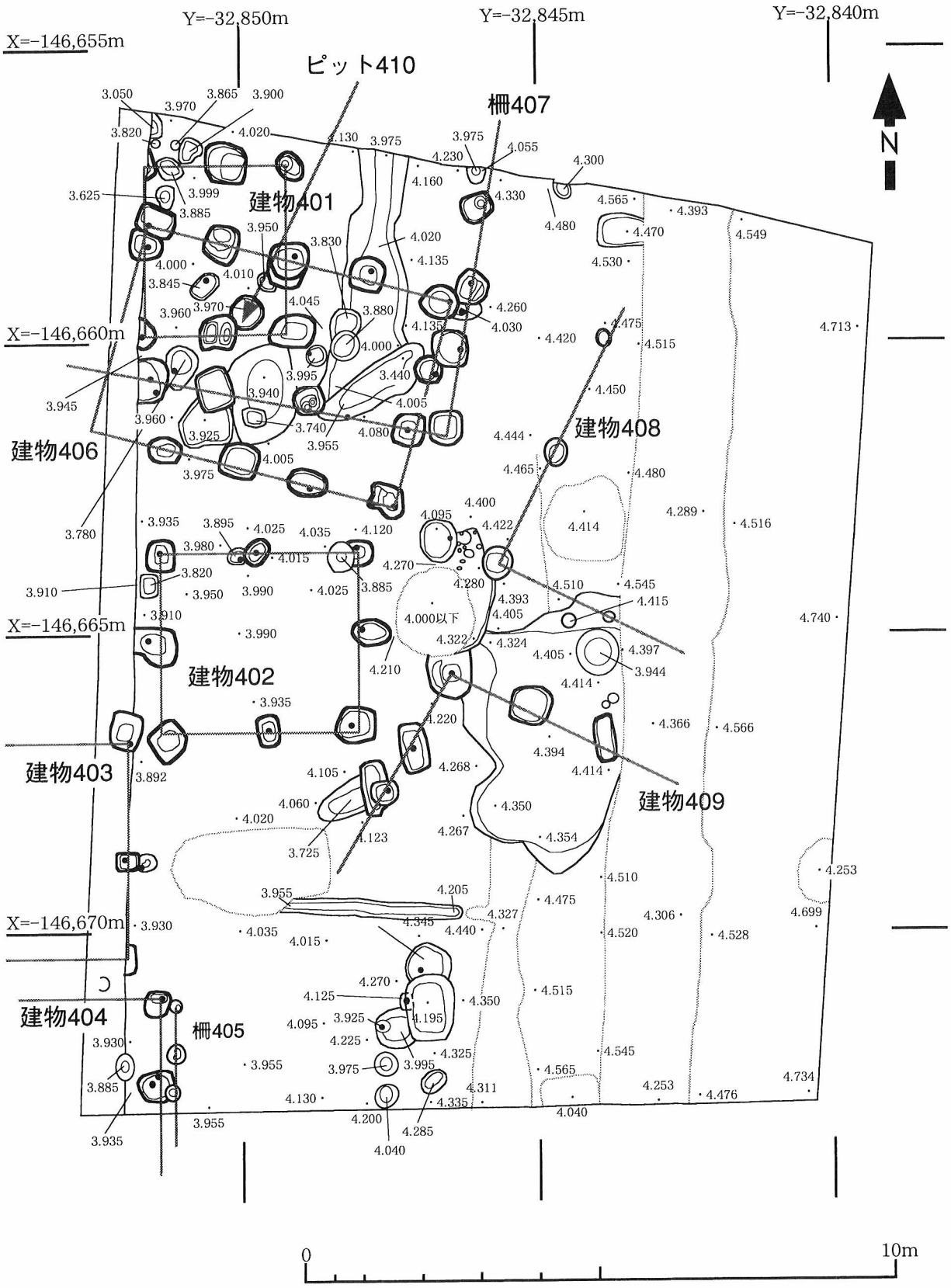
調査区南西端部で検出した。2基の柱穴を検出したに過ぎないが、ほとんどが調査区外となる建物と考えた。ほぼ座標に沿う方位をとり、南北約2m(1間)以上を測る。東西の規模は不明である。柱穴は一辺約40cmを測る隅丸方形や長辺約60cm、短辺約50cmを測る隅丸方形を呈し、やや不揃いである。2基とも径約10cmを測る柱痕跡が確認できた。それらは深いもので約32cmを測る。図示した遺物はない。

柵 405

調査区南西端部で検出した。3基の柱穴を検出したに過ぎないが、調査区外へのびる柵と考えた。ほぼ座標に沿う方位をとり、南北約150cm(2間)以上を測る。柱間は約80cmと約70cmを測り不揃いである。柱穴は径約20cmを測る円形や長辺約30cm、短辺約26cmを測る不整形な隅丸方形を呈し、不揃いである。柱痕跡は確認できなかった。それらは深いもので約13cmを測る。図示した遺物はない。本遺構はこれまで述べた建物に比べて柱穴が小規模で柱間も短い。本来は第III層上面に属する遺構を見逃した可能性がある。

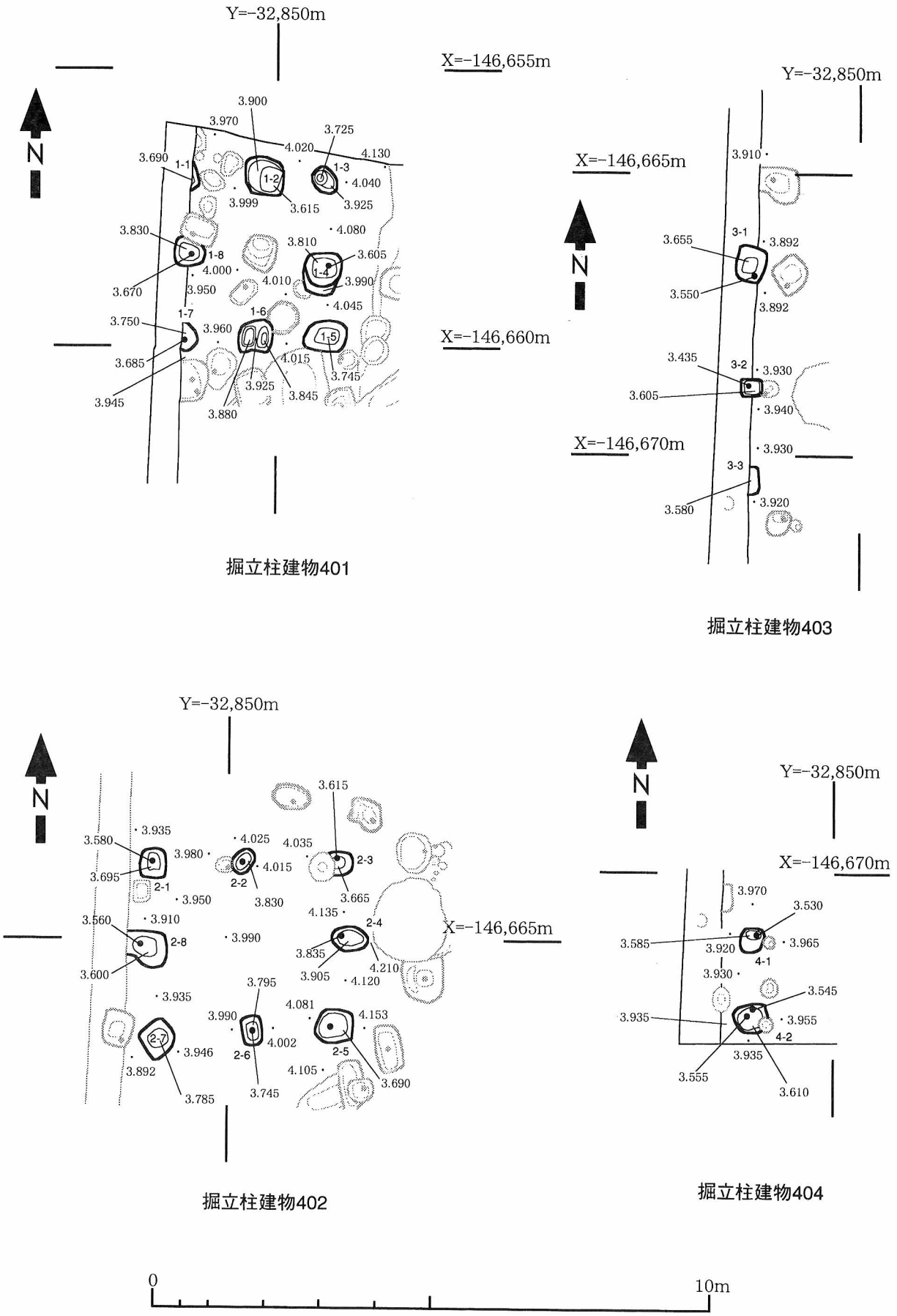
掘立柱建物 406

調査区北西部で検出した。掘立柱建物401を切る。座標北から東へ約15°振る方位をとり、南北約3.6m(3間)、東西約5.3m(4間)を測る。西壁に西辺柱穴と思われる遺構が存在するため東西4間の建物と考えた。柱間は、ばらつきがあるが約130cmを測る。柱穴は長辺約70cm、短辺約60cmを測る隅丸長方形や長辺約70cm、短辺を測る約40cmの楕円形を呈するもの等があり、不揃いである。3基を除いて径約10cmを測る柱痕跡が確認できた。それらは深いもので約42cmを測る。図示した遺物には北西隅の柱穴(406-1)掘方から出土した製塩土器片(図3.26-8・図4.2-7)、北東隅の柱穴(406-5)掘方から出土した須恵器高坏蓋片(図3.26-9)、東辺北よりの柱穴(406-6)掘方から出土した須恵器坏片(図3.26-10・11)、東辺南よりの柱穴(406-7)掘方から出土した製塩土器片(図3.26-12・4.2-3, 図3.26-13・4.2-2)、南辺中央の柱穴(406-10)から出土した製塩土器片(図3.26-14・図4.2-6)がある。また、南東隅の柱穴(406-8)には柱の下部が比



数字はT.P.値。
黒塗りは柱または柱痕跡を示す。

図3.16　第Ⅳ層上面検出遺構平面図(S=1：100)



16　図 3.17　第 IV 層上面掘立柱建物 401 ～ 404 平面図(S=1：100)

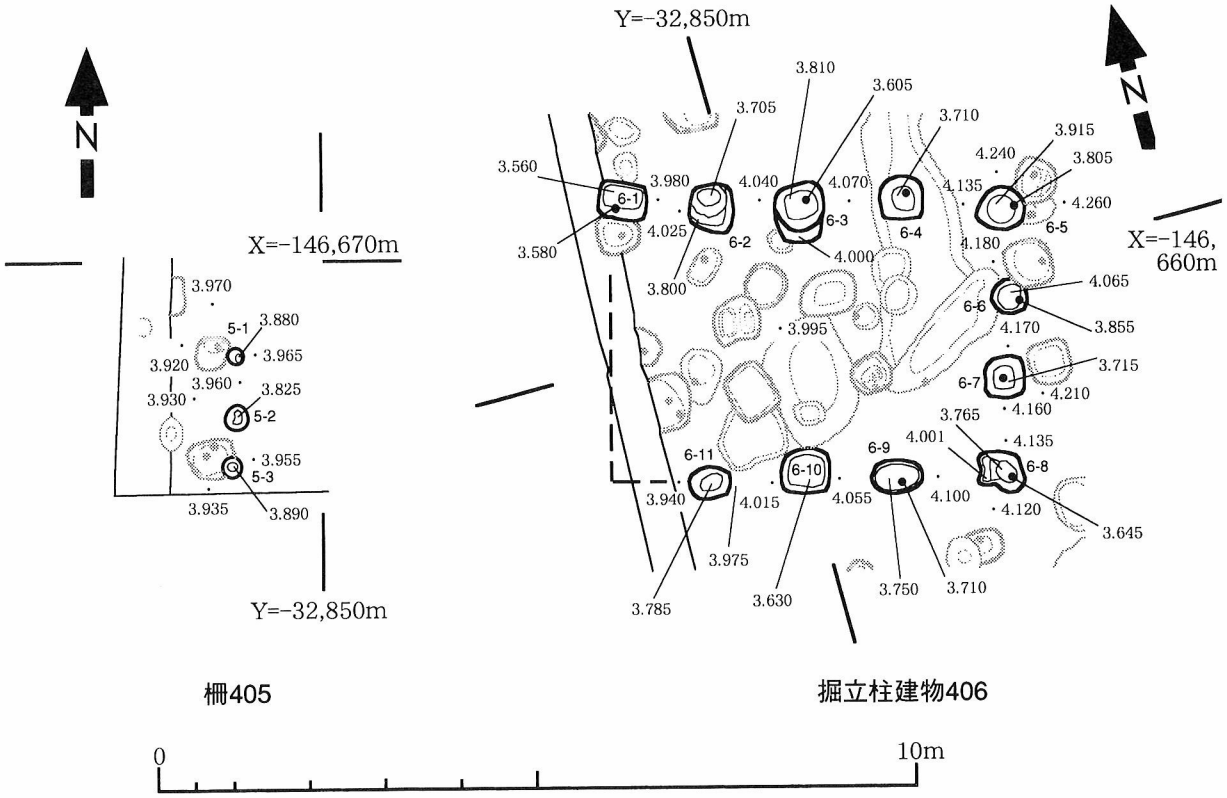


図 3.18　第 IV 層上面柵 405・掘立柱建物 406
平面図(S=1：100)

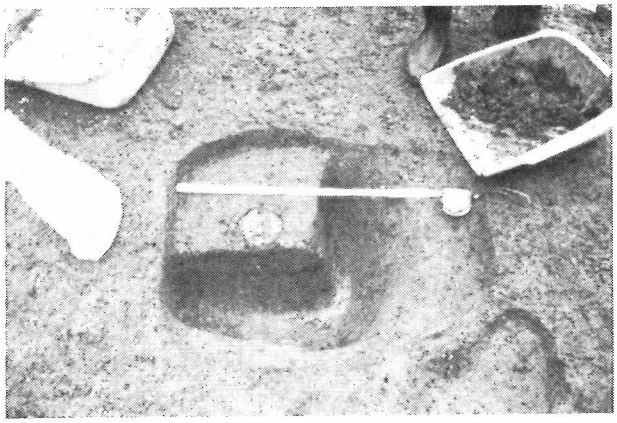


図 3.19　第 IV 層上面掘立柱建物 406
北辺中央柱穴(406-3)の柱痕跡検出状況
(西から)
柱痕跡は径約 10cm を測る。

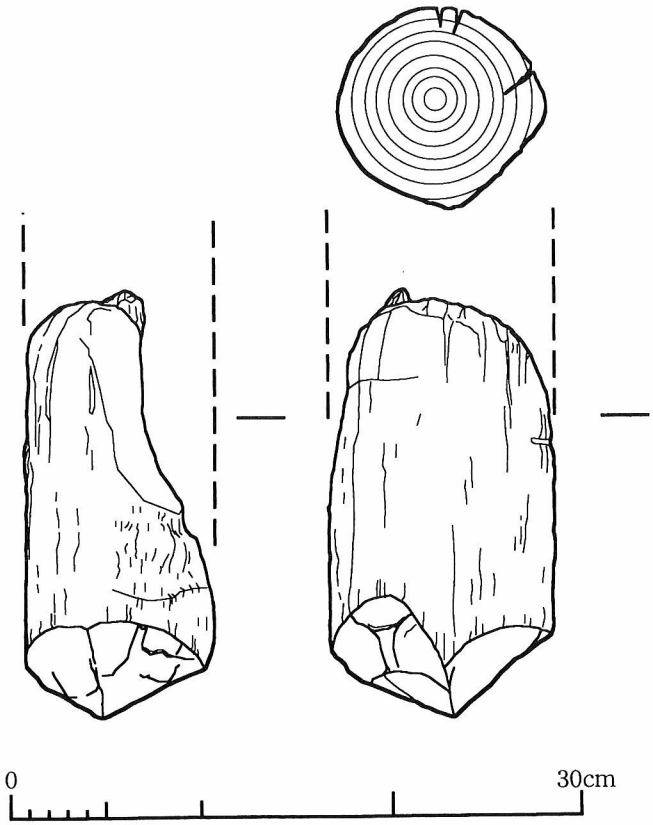


図 3.20　第 IV 層上面掘立柱建物 406
南東隅柱穴(406-8)の柱実測図(S=1：4)

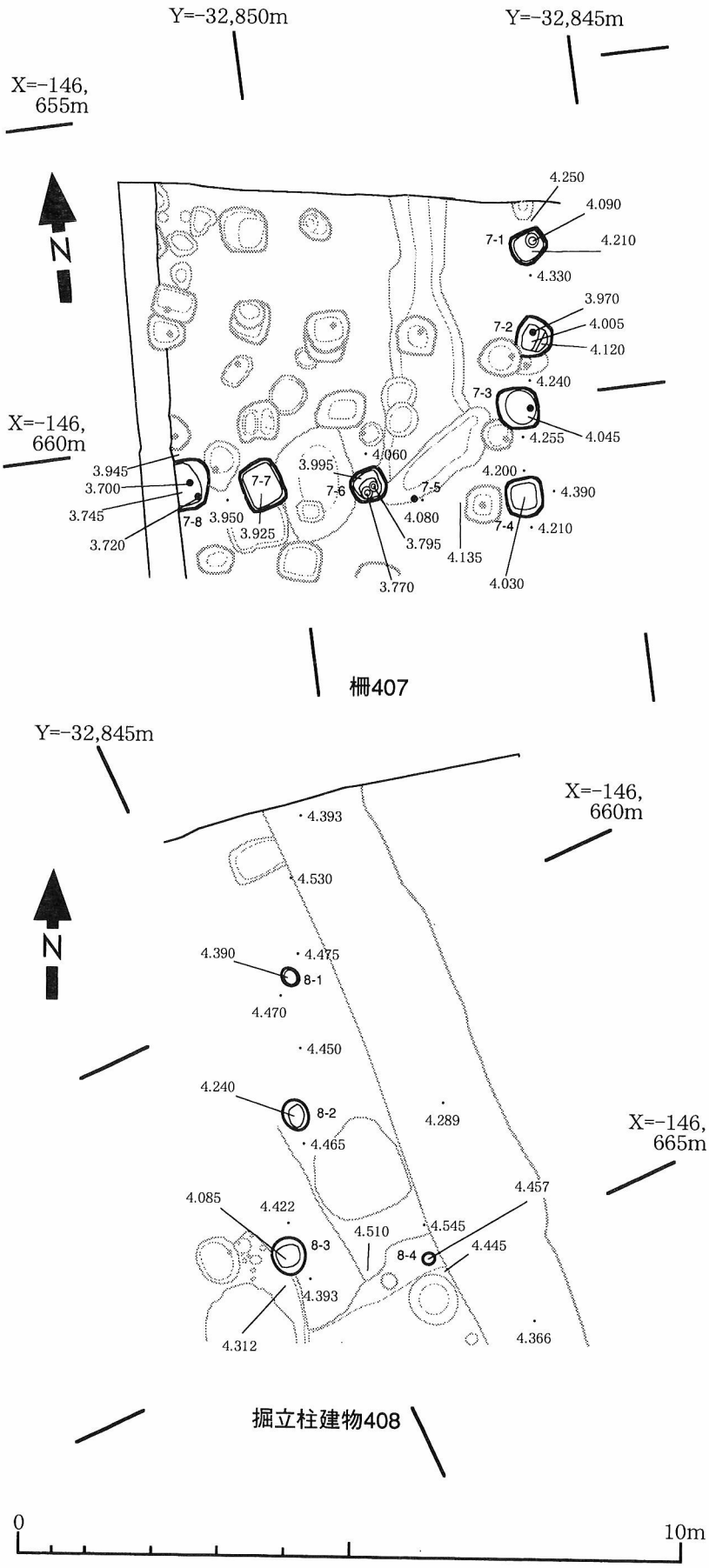


図3.21　第VI層上面柵407・掘立柱建物408平面図(S=1：100)

較的良好に遺存していた(図3.20)。

柵407

調査区北西部で検出した。現地調査では東南隅の2基の柱穴を組み合うものと認識していたが、その後の検討の結果、調査区外にのびる逆L字状の柵と考えた。このため掘立柱建物406との重複関係の追求は不十分なもので、建物406を切る柱穴があれば建物406に切られる柱穴も存在する。座標北から東へ約9°30′振る方位をとり、南北約4.5m(3間)以上、東西約5.3m(4間)以上を測る。南北の柱間は約115cmと約140cmを、東西の柱間は約80～160cmを測る。柱穴は一辺約60cmを測る隅丸方形や長辺約70cm、短辺約60cmを測るの隅丸長方形を呈するもの等があり、個々の柱穴はおよそ方形を呈するが方向が不揃いである。2基を除いて径約10cmを測る柱痕跡が確認でき、掘方を検出できなかったものもある(409-5)。それらは深いもので約20cmを測る。東辺南よりの柱穴(407-3)掘方から製塩土器片が出土している(図4.2-4)。

掘立柱建物408

調査区中央部で検出した。座標北から東へ約27°振る方位をとり南北4.2m(2間)以上、東西2.1m(1間)以上を測る。柱間は約210cmを測る。柱穴は最大径約50cmを測る円形を呈し、深いもので約33cmを測る。いずれも柱痕跡は確認していない。図示した遺物には南東隅の柱穴(408-3)

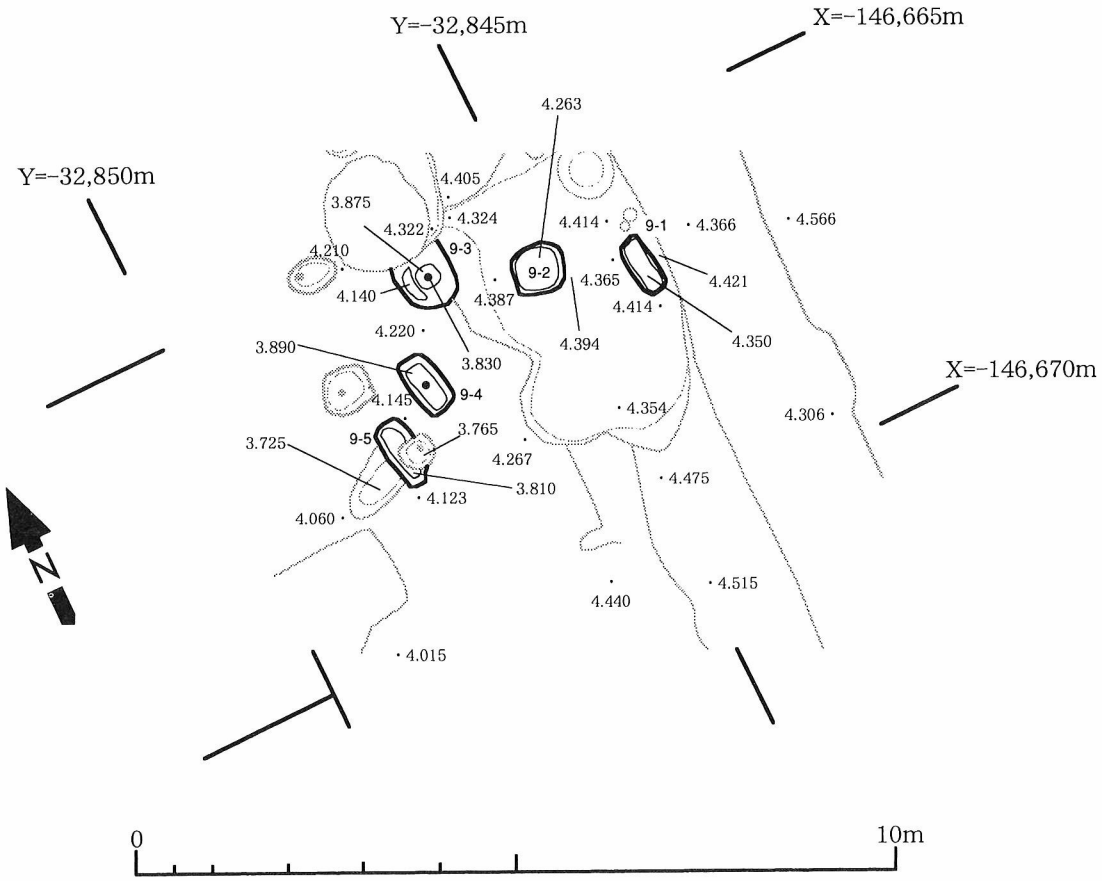


図 3.22　第 VI 層上面掘立柱建物 409 平面図
(S=1：100)

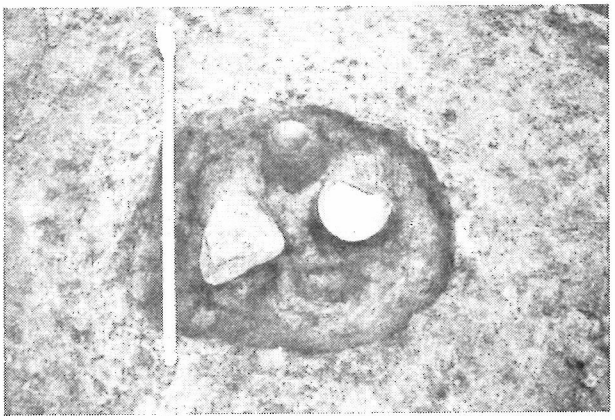


図 3.23　第 IV 層上面掘立柱建物 409
北辺柱穴(409-2)遺物出土状況(南西から)
上は図 3.25-17 の須恵器はそう。
右は図 3.25-18 の土師器皿。左は石。
これらは根石の替わりに埋設されたものであろうか。

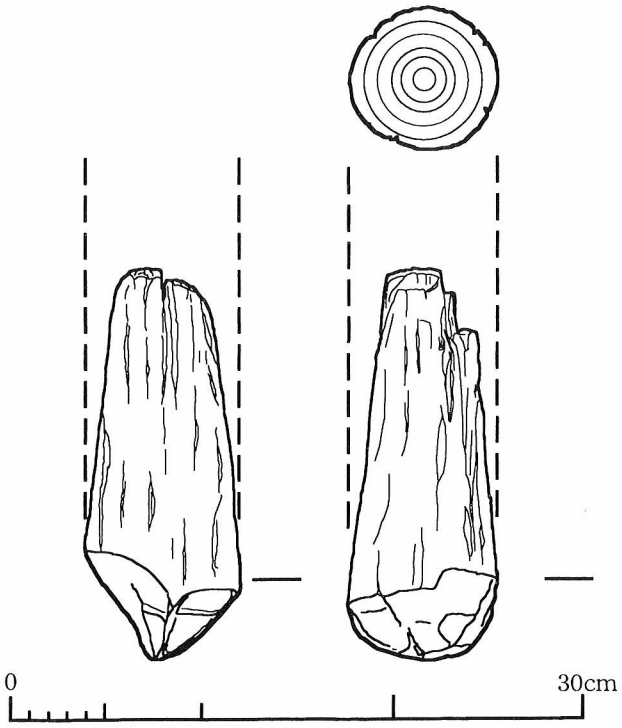


図 3.24　第 IV 層上面掘立柱建物 409
北西隅柱穴(409-3)の柱実測図(S=1：4)

から出土した須恵器坏片(図3.26-15・16)がある。本遺構はこれまで述べた建物に比べ柱穴が小規模で柱間も長い。このため、他の遺構とは時期が異なる可能性がある。

掘立柱建物409

調査区中央部で検出した。柱穴は整然と列をなさないが、南半分を削平された建物と考えた。座標北から東へ約26°30′振る方位をとり南北2.6m(2間)以上、東西3.0m(2間)以上を測る。南北の柱間は約140cmと約120cmを、東西の柱間は約150cmを測る。柱穴は一辺70cm前後を測る隅丸方形や長辺約85cm、短辺約50cmを測る隅丸長方形を呈するもの等があり、隅丸長方形のものは建物の軸に揃わず、およそ南北方向を向く。深いもので約44cmを測る。図示した遺物には北辺西よりの柱穴(409-3)から出土した須恵器はそう体部(図3.26-17)と完形に近い土師器皿(図3.26-18)がある。土師器皿は内面に1段の放射暗文と螺旋暗文を施し、外面には篦磨きを施す。ただし、洗浄によって表面が剥落し、現在ではごく一部しか確認できない。西辺南の柱穴(409-5)からは製塩土器片(図4.2-9)が出土している。また、北西隅の柱穴(409-3)には柱の下部が比較的良好に遺存していた(図3.24)。

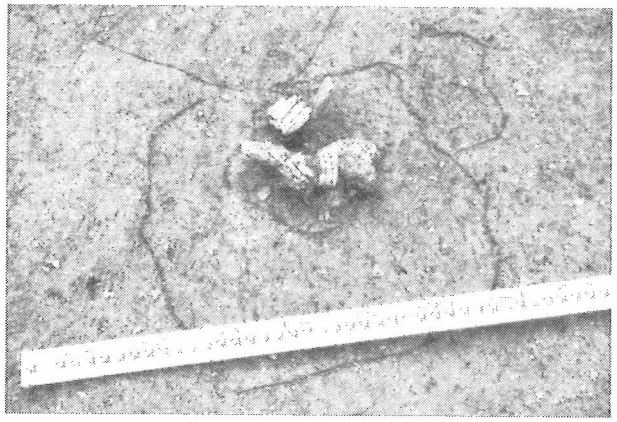


図3.25　第VI層上面SP410馬歯・骨出土状況(北東から)

SP410

掘立柱建物401に切られる。径約50cmを測る円形を呈し、深さ約4cmを測る。柱痕跡は確認されず、組み合うものも見られなかった。土師器鉢片(図3.26-19)や須恵器細片、製塩土器細片、馬歯・馬骨(図4.1)等が出土した。

第V層上面検出遺構

柵列、ピット、河川等を検出した。ピットには柱痕跡が検出され柱穴と確認できるものもあるが、すべてを建物に復元できなかった。一部は第IV層上面で見逃したものがある。これらの遺構からは古墳時代の土師器や須恵器、製塩土器等が出土したが、ほとんどは細片で量も少ない。

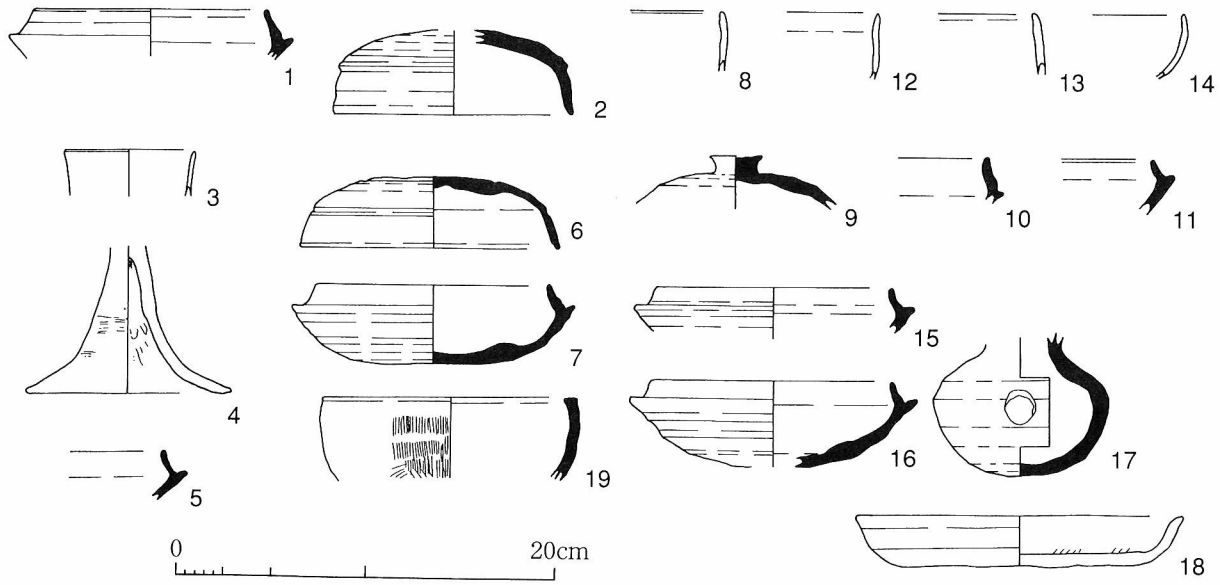
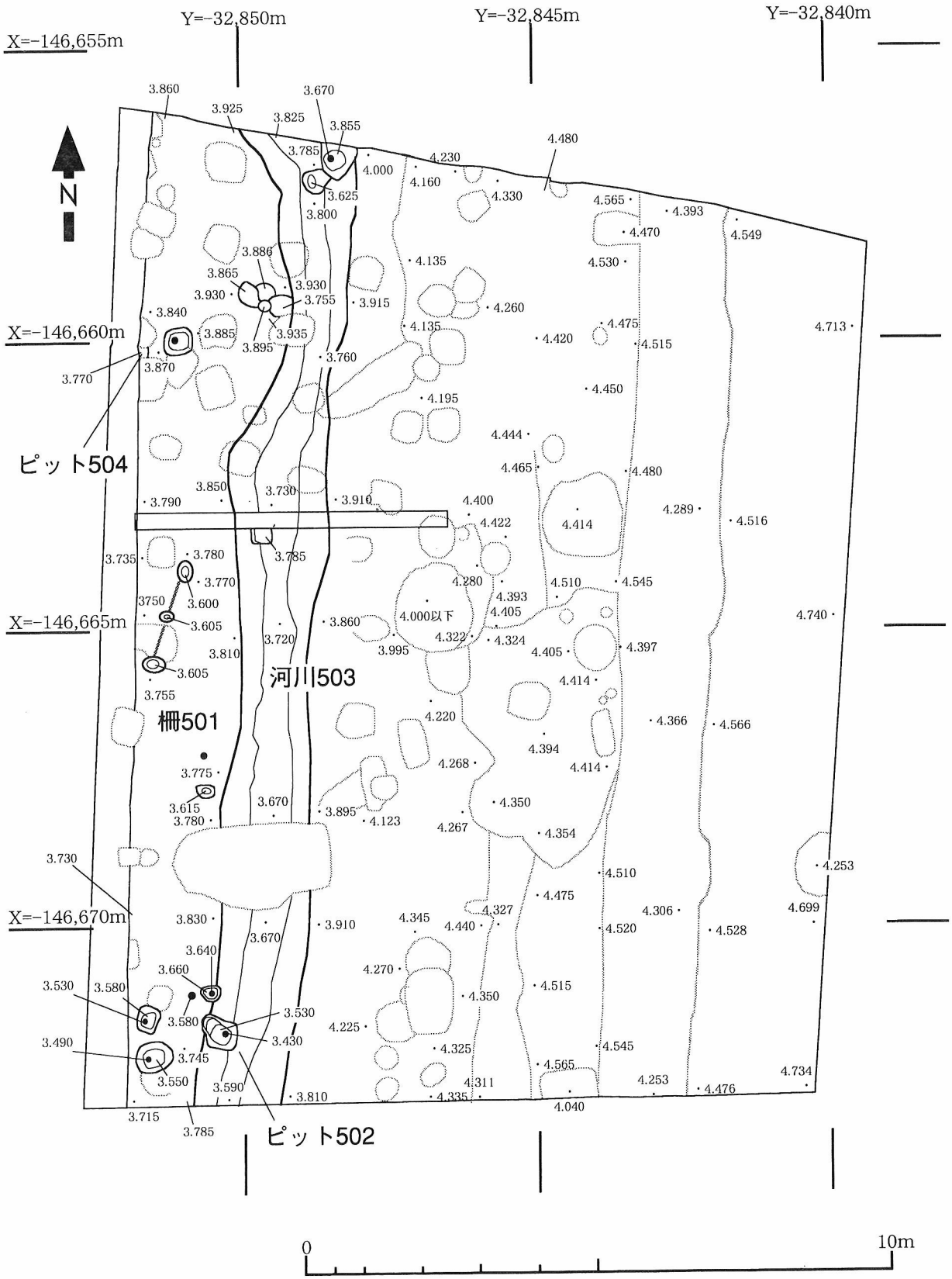


図3.26　第VI層上面建物401(1～2)・建物402(3～5)・建物403(6～7)・建物406(8～14)・建物408(15～16)・建物409(17～18)・ピット410(19)出土遺物(S=1：4)



数字はT.P.値。
黒塗りは柱または柱痕跡を示す。

図3.27　第Ⅴ層上面検出遺構平面図(S=1：100)

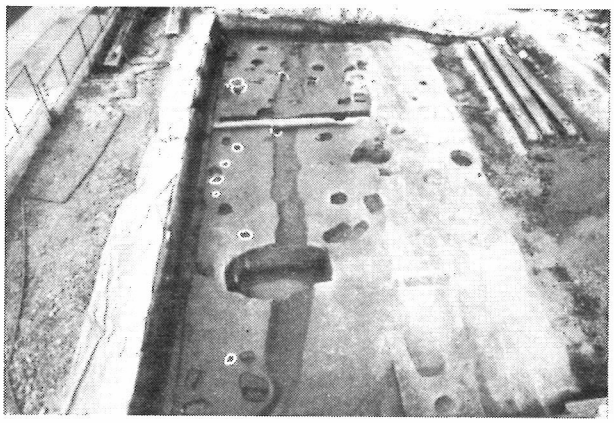


図3.28　第Ⅴ層上面検出遺構全景(南から)

調査区西端の白線を引いた一列に並ぶピットが柵501。

白線を引いていない南北方向の不整形な溝状を呈するものが河川503。

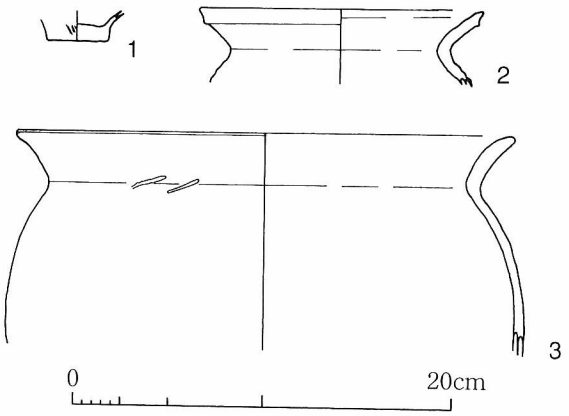


図3.30　第Ⅵ層(1)・第Ⅴ層上面ピット504(2)・側溝(3)出土遺物(S=1：4)

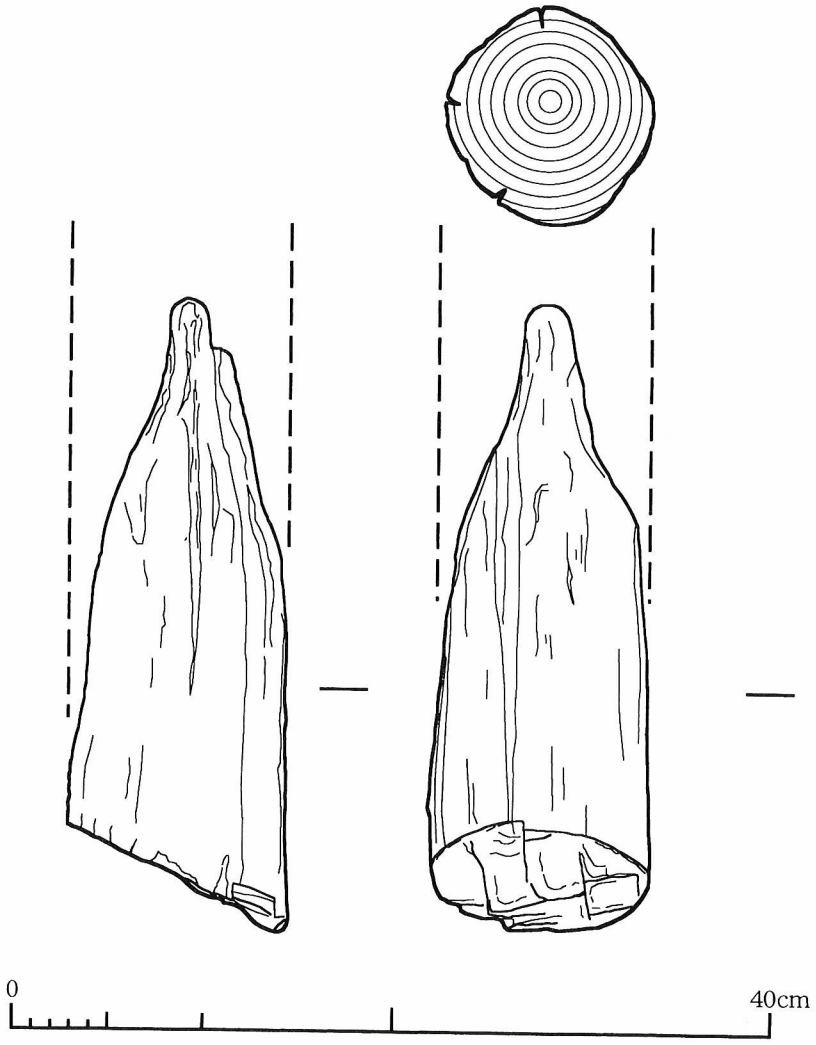


図3.29　第Ⅴ層上面ピット502の柱実測図(S=1：4)

柵501

調査区南西端部で検出した。3基の柱穴を検出したに過ぎない。座標北から東へ約18°30′振る方位をとり、南北約160cm(2間)を測る。柱間は約80cmを測る。柱穴は楕円形を呈し、最大で長辺約40cm、短辺約25cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。それらは深いもので約15cmを測る。遺物は出土しなかった。

ピット502

調査区南西部で検出した。一辺約50cmを測る隅丸方形を呈し、北西隅に凸部をもつ。深さ約10cmを測り、土師器や須恵器の微細片等が出土した。図示した遺物はない。底には柱の下部が比較的良好な状態で遺存していた(図3.29)。西に位置する柱穴と組み合い、建物を構成すると思われるが、詳細は不明である。

河川503

第Ⅳ層によって埋没している。最大幅約160cm、最深約22cmを測

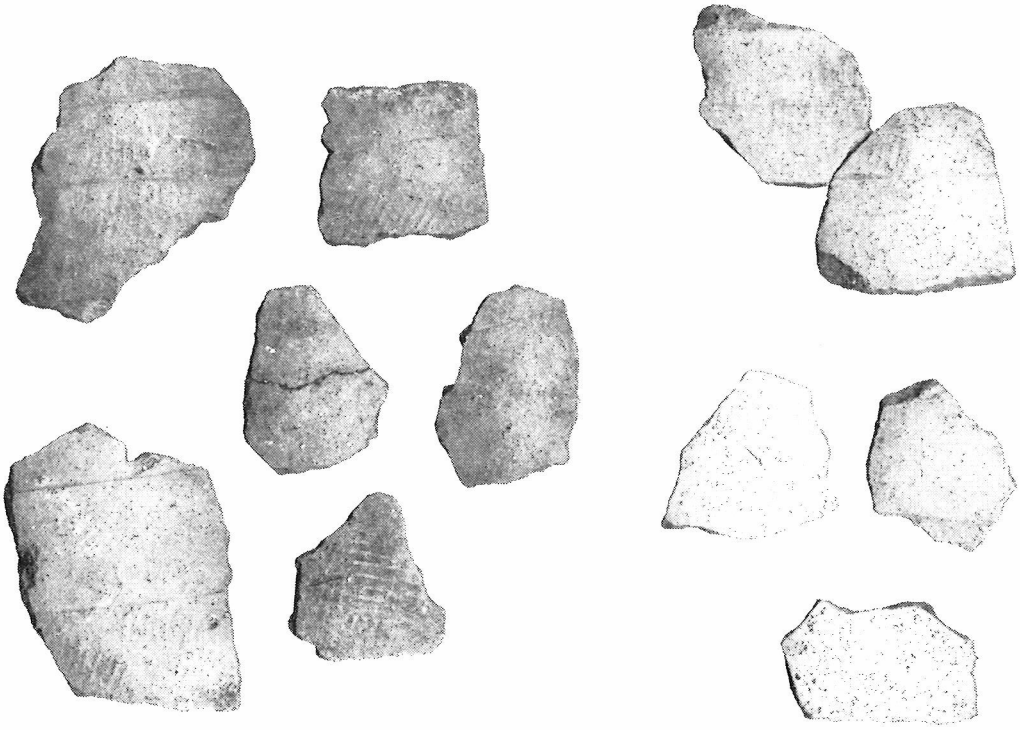


図 3.31　同一個体と思われる韓式系土器(S ≒ 1：2)

左の 6 点は第 V 層上面遺構検出中に出土。他は第 III 層中から出土した。

外面の叩きを一部撫で消し、内面は丁寧に撫でて叩きを消している。色調は灰褐色から黄褐色を呈し、胎土には径 3mm 以下の石英や長石、雲母、赤色粒子を含む。土師質焼成である。

る。古墳時代の土師器や須恵器、製塩土器等が出土した。図示した遺物はない。この河川は第 23 次調査で検出されている自然河川の続きと考えられる(注 7)。

第 IV 層等出土遺物

図3.30-1は第IV層から出土した弥生土器底部片で外面に刷毛を施す。図 3.30-2 は第 V 層上面のピット 504 から出土した土師器口縁片である。全体に摩耗が著しく、同一個体と思われるものが

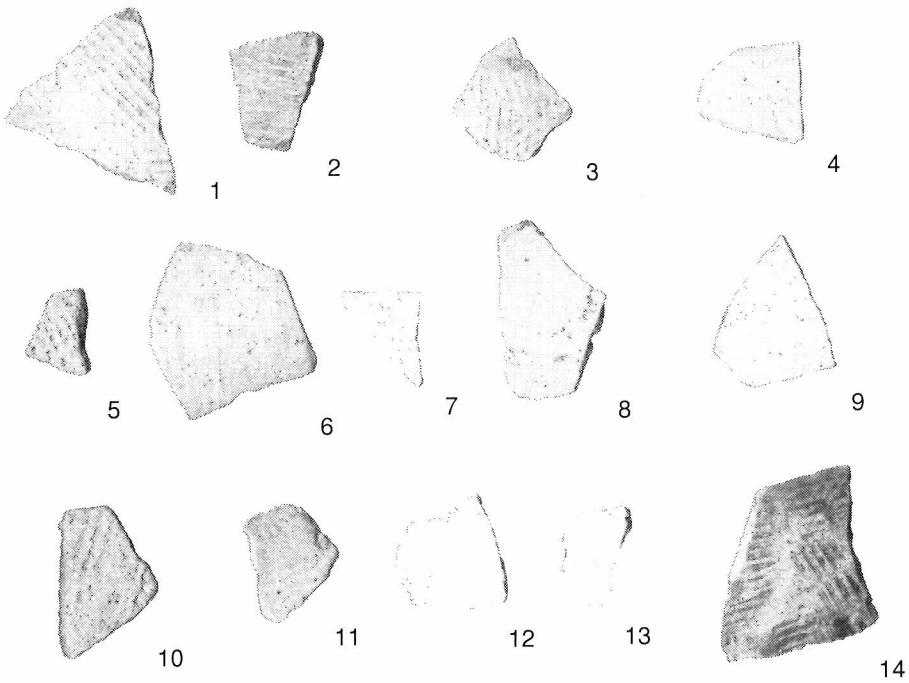


図 3.32　韓式系土器 2(S ≒ 1：2)

第 III 層出土(3 ～ 6・8 ～ 9・11 ～ 13)・第 IV 層出土(1 ～ 2・10)・第 IV 層上面掘立柱建物 402 西辺中央柱穴(402-8)出土(7・14)

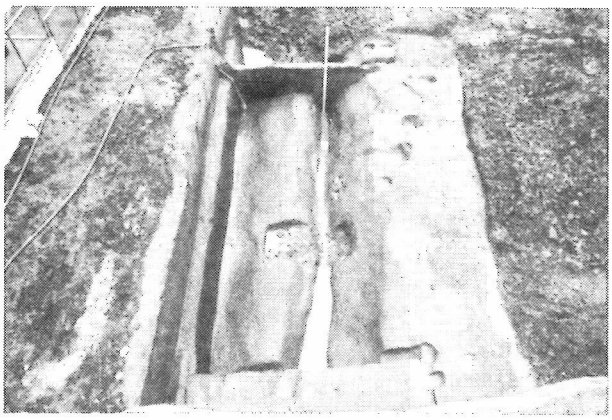


図3.33　第VII層上面検出遺構全景(南から)
中央の底に水が溜まった南北方向のものが溝601。
左の傾斜は海蝕涯が顕著に落ちる部分。

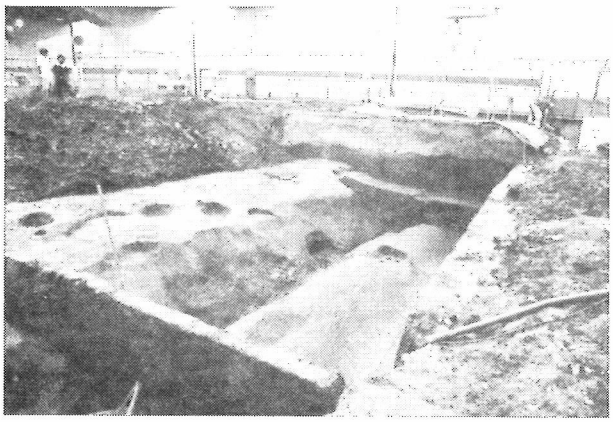


図3.34　同上南部(北西から)

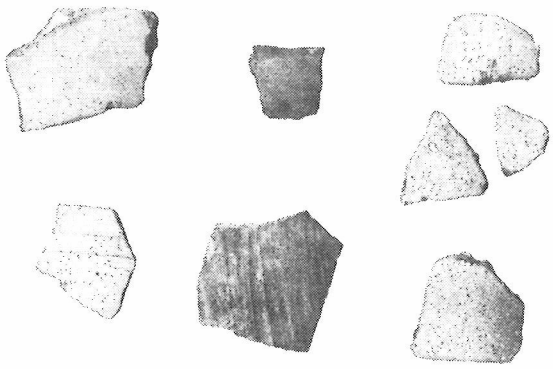


図3.35　第VI層出土の弥生土器
左上は壷の口縁部。左下は壷肩部。
中央上部の小片は刷毛を施す。
中央下部の小片は箆けずりを施す。
右は接合できないが1個体の底部片。

第IV層から出土しており、下位の第IV層のものが混入したと思われる。図3.30-3は第IV層上面で側溝を掘削中に出土した土師器甕片。胎土は暗褐色を呈し、角閃石を含む。いわゆる生駒西麓産と思われる。

韓式系土器

第III層や第IV層、建物402西辺中央柱穴(402-8)等から韓式系土器細片が出土している(図3.31・32)。すべて焼成は土師質で、1点(図3.32-6)を除いて内面は叩きを撫で消している。格子目の叩きは1点(図3.32-5)のみである。図3.32-4は鉢？の口縁部。図3.32-7・12・13は同一個体と思われる。

第VI層上面検出遺構及び第VI層出土遺物

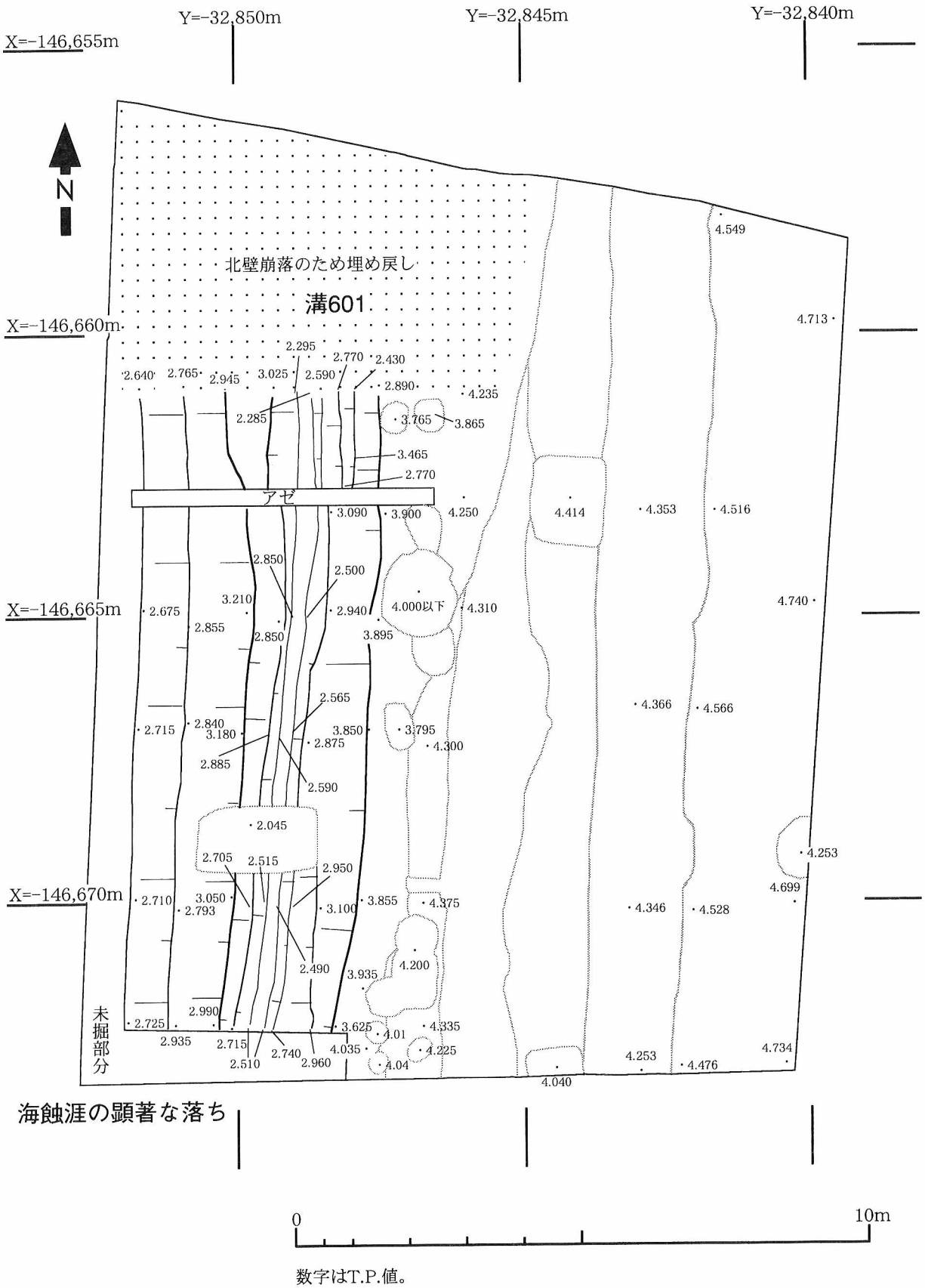
調査区西部で南北方向の溝を検出した(溝601)。幅約6m、深さ約2.5mを測り、長さ約16mを検出した。北へ向かって深くなり、両端とも調査区外へ続く。埋土は数層に分かれる。大半を機械によって掘削したためか、遺物はほとんど出土しなかった。この溝は第VII層上面で検出した海蝕涯の肩部に沿うもので、第33次調査で検出されている溝24・溝36の続きと思われる(注8)。

第VII層上面検出遺構

第32・33次調査等で検出されている縄文時代の海蝕涯を一部検出した(注9)。西へ向かって傾斜面と平坦面を繰り返しながら落ちていくと考えられる。調査区西端では海蝕涯の始まりより約150cm低くなっている。

第4章　おわりに

今回の発掘調査では縄文時代の海蝕涯、弥生時代の溝、古墳時代の掘立柱建物や柵、中世の井戸や掘立柱建物、近世から近代の耕作跡等を検出することができた。中世の井戸や掘立柱建物は東に隣接する西ノ辻遺跡を中心とする集落の一部と考えられ、弥生時代の溝等についても検討を加える必要があろうが、機会を改めることとし、ここでは古墳時代の遺構や遺物について補足を述べる。



数字はT.P.値。

図3.36　第VII層上面検出遺構平面図(S=1：100)

図4.1　第IV層上面ピット410出土馬歯・馬骨(S≒1：2)
比較的遺存状態のよいものを示した。他の遺構等から出土したものも遺存状態が悪く部位を判定できるものはない。

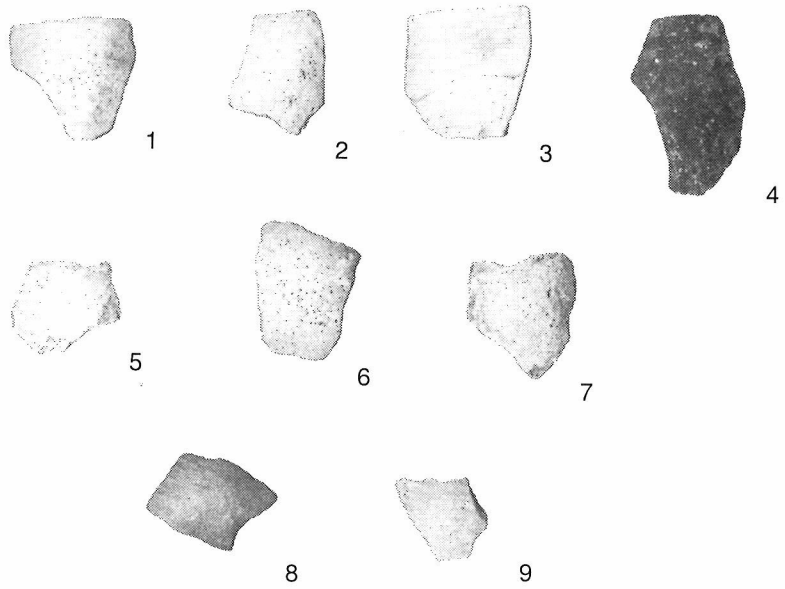
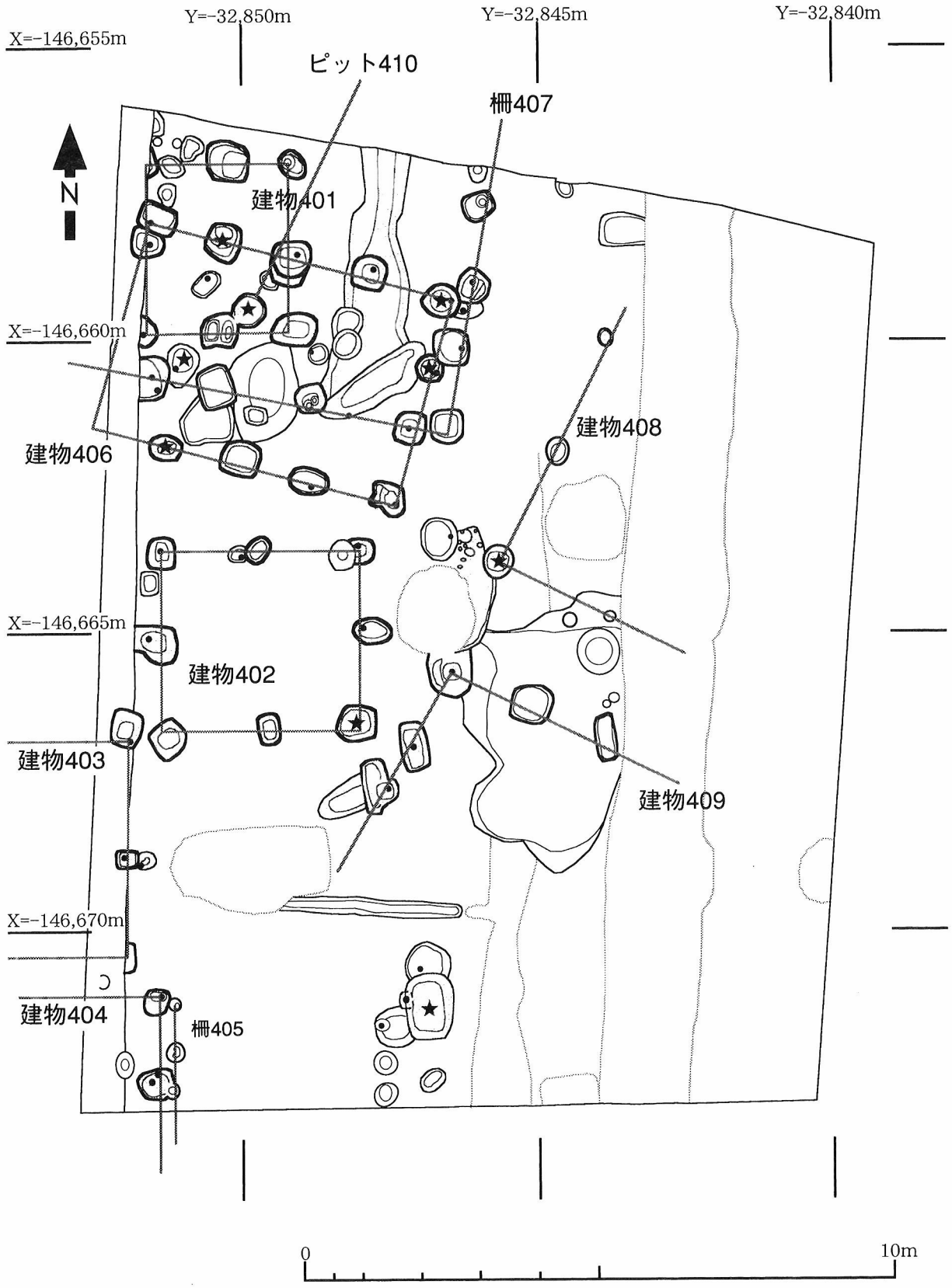


図4.2　第III層・第IV層上面建物出土の製塩土器(S≒1：2)
8は底部、他は口縁部。いずれも摩耗が著しく8・9以外は叩きが観察できない。
1は第III層出土(図3.12-6)、2は建物406出土(図3.26-13)、3は同出土(図3.26-12)、4は建物403東辺中央の柱穴(403-2)出土、5は建物402出土(図3.26-3)、6は建物406出土(図3.26-14)、7は同出土(図3.26-8)、8は建物403東辺中央の柱穴(403-2)出土、9は建物409西辺南の柱穴(409-5)出土。

古墳時代の遺構は第V層上面と第IV層上面で検出している。遺構には掘立柱建物や柵等があり、この地に集落が存在したと考えられる。第V層上面で検出した遺構からは須恵器片が出土しており、これらは古墳時代前期まで遡るものではない。第V層上面には河川503を埋める第IV層が堆積しているが、集落は継続して営まれていたようである。第IV層上面で検出した遺構のうち掘立柱建物408は時期が古墳時代よりも下る可能性があり、掘立柱建物409は柱穴から出土した土師器皿から古墳時代のものではない。他の建物や柵はほぼ座標に沿う方位をとるものや東に振れるものがあり、古墳時代のものではあるが、やや時期に幅があると考えられる。

出土遺物には土師器や須恵器の他に製塩土器や韓式系土器、馬歯・馬骨等がある。製塩土器は第IV層上面検出遺構のほとんどから出土している(図4.3)。また、第V層上面検出遺構と第IV層、第IV層上面検出遺構、第III層出土の土器の破片数を数えてみた(表4.1)。遺構から出土した製塩土器は高い数値を示すが、包含層の掘削が比較的粗く、遺構の掘削が比較的



トーンは製塩土器が出土した遺構。
★は馬歯または馬骨が出土した遺構。

図 4.3　第 VII 層上面検出の製塩土器及び馬歯・骨出土遺構(S=1：100)

細かいことを思えば当然の結果と言える。ここに示した数字は破片数を数えたにすぎず、あくまでも目安であるが、製塩土器の出土量が多いことはうかがわれる。なお、今回の調査地点から東へ約500mの地点で行われた神並遺跡第17次発掘調査では古墳時代に埋没した河川が検出されている。その河川から出土した土器の破片数も数えている。この例では製塩土器は1パーセント前後である(表4.2・注10)。

塩は馬にとって重要な飼料であり、製塩土器と馬歯・馬骨には密接な関係があると思われる。古墳時代の鬼虎川遺跡では製塩土器と馬歯・馬骨が出土しており、馬が飼育されていた可能性が高い。数頭程度であったのか、牧場のようなものであったのか、その規模や状況については不明であり、その追求は今後の課題である。

層位・遺構名	製塩土器	須恵器			須恵器	土師器			土師器	土器
		供膳具	貯蔵具	不明	小計	供膳具	煮炊具	不明	小計	合計
第III層	100	829	542	45	1416	63	430	737	1230	2746
	3.6%				51.6%				44.8%	
第IV層	20	47	25	4	76	9	78	100	187	283
	7.1%				26.9%				66.1%	
IV層上面建物1	8	14	8	0	22	2	23	18	43	73
IV層上面建物2	21	16	8	0	24	3	23	38	64	109
IV層上面建物3	9	6	0	1	7	1	5	4	10	26
IV層上面建物4	3	0	1	0	1	0	0	4	4	8
IV層上面建物6	38	16	11	3	30	6	28	50	84	152
IV層上面柵5	1	1	2	0	3	1	2	4	7	11
IV層上面柵7	16	7	3	0	10	1	8	13	22	48
他IV層上面遺構	49	45	23	1	69	2	47	76	125	243
IV層上面遺構小計	145	105	56	5	166	16	136	207	359	670
	21.6%				24.8%				53.6%	
V層上面遺構小計	5	1	1	0	2	2	7	15	24	31
	16.1%				6.5%				77.4%	
合計	270	982	624	54	1660	90	651	1059	1800	3730
	7.2%				44.5%				48.3%	

表4.1　第III層・第IV層・第IV層上面遺構・第V層上面遺構出土古墳時代土器破片数一覧表

接合作業後、明らかに同個体と思われるものを除いた破片数を数えた。便宜的に須恵器坏・坏蓋・高坏・同蓋・器台等を供膳具、須恵器はそう・提瓶・甕・壷等を貯蔵具、土師器坏・高坏等を供膳具、土師器壷・甕・甑・釜等を煮炊具とした。

10cm四方の破片も1cm四方の破片も1個としている。そのため須恵器甕や土師器釜等は実態よりも多く数えている可能性が高い。ここに示した数値はあくまでも目安である。

また、第IV層上面遺構のうち掘立柱建物408と掘立柱建物409は除いた。

なお、今回の調査で出土した古墳時代の製塩土器は総数135点を数える。

注

1：藤井直正・都出比呂志・河内歴史研究グループ(1966)『原始・古代の枚岡』P.36 ～ 37

2：下記文献に第1次から第52次までの概要や文献等を記した一覧表と調査地点位置図が掲載されている。

若松博恵他(2002)『一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告』東大阪市教育委員会 P.4 ～ 7

3：鬼虎川遺跡第23次発掘調査は大阪府教育委員会が実施した。大阪府では鬼虎川遺跡第57-6区という名称を付している。

西口陽一・宮崎泰史他(1986)『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要II-東大阪市東石切町・西石切町所在-』大阪府教育委員会

4：大阪府教育委員会が発掘調査を実施した。現在報告書作成中。下記文献に成果が紹介されている。

財団法人東大阪市文化財協会(1984)『国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展　甦る河内の歴史』P.24 ～ 25

5：勝田邦夫・曽我恭子他(1994)『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会 P.109 ～ 111

6：才原金弘・藤城泰他(1996)『鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会P.12・15

7：注3文献 P.105

8：注6文献 P.19・21 ～ 22・25 ～ 26・28

9：注5文献 P.50 ～ 56

注6文献 P.32

10：金村浩一(2001)『神並遺跡第17次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会 P.25

種　類	下層	中層	上層	合計	%
須恵器坏	0	63	189	252	
須恵器高坏	0	6	34	40	
須恵器碗	0	2	5	7	
須恵器蓋	0	12	42	54	
須恵器はそう	0	1	14	15	
須恵器壷	0	38	173	211	
須恵器甕	3	137	786	926	
須恵器横瓶	0	0	1	1	
須恵器器台	1	0	2	3	
須恵器不明	0	1	7	8	
須恵器合計	4	260	1253	1517	46.7%
土師器坏	0	3	139	142	
土師器高坏	0	12	71	83	
土師器釜	0	41	432	473	
土師器甕	3	31	224	258	
土師器壷	0	1	5	6	
土師器甑	0	2	13	15	
土師器竈	0	2	12	14	
土師器不明	4	74	593	671	
土師器合計	7	166	1489	1662	51.1%
製塩土器	0	10	22	32	1.0%
弥生土器	8	16	15	39	1.2%
合　計	19	452	2779	3250	100%

表 4.2　神並遺跡第 17 次発掘調査で検出した河川出土の土器破片数
注 10 文献表 2.1 を転載

図 4.4　第 III 層出土須恵器坏底部内面
(S=1：1)
底部内面に叩き痕を残す須恵器坏。
この他、箆記号を施す須恵器坏が数点出土している。

報告書抄録

ふりがな	きとらがわいせきだい41じはっくつちょうさほうこく
書名	鬼虎川遺跡第41次発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	金村浩一
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
作成法人ID	42710
郵便番号	577-0843
電話番号	06-6736-0346
住所	大阪府東大阪市荒川3丁目28-21
発行年月日	2002.08.30
ふりがな	きとらがわいせき
遺跡名	鬼虎川遺跡
ふりがな	おおさかふひがしおおさかしにしいしきりちょう5ちょうめ181-1・2
遺跡所在地	大阪府東大阪市西石切町5丁目181-1・2
コード	市町村27227　　遺跡番号　不明
北緯	34°40′38″　(旧測地系)
東経	135°38′43″　(旧測地系)
調査期間	1996.07.22～10.03
調査面積	約325㎡
調査原因	共同住宅建設
種別	集落/耕作地
主な時代	縄文/弥生/古墳/中世/近世～近代
遺跡概要	縄文-海蝕涯/弥生-溝-弥生土器/古墳-掘立柱建物+柵+土壙+ピット-土師器+須恵器+製塩土器+韓式系土器/中世-掘立柱建物+井戸+溝-土師器+瓦器+白磁+青磁+回転台土師器+丸平瓦/近世～近代-耕作跡-陶磁器+土人形
特記事項	中河内で数少ない回転台土師器が出土した。

鬼虎川遺跡第41次発掘調査報告
2002年8月30日
発行　財団法人東大阪市文化財協会
〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21　TEL.06-6736-0346
印刷　株式会社 ダイニチ
〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島5-15-13　TEL.06-6451-4133
紙質　表紙　上質 四六判Y目 135 Kg　　本文　ニューエイジ 57.5 Kg
製本　無線とじ

The 41th Excavation Report of

Kitoragawa Site,
Higashi-osaka City,Osaka Pref., Japan.

June 2002

Higashi-osaka City Cultural Heritage Association

鬼虎川遺跡第四十一次発掘調査報告

二〇〇二年八月

財団法人東大阪市文化財協会